高等小學讀本 卷三

教科書用

文部省

T1A4
1H8
To46

43177
教科書文庫
4
810
32-1928
25000
29786

廣島大學 東洋哲學文化研究所 圖書之印

農村用

尚等小學讀本 卷三

文部省

受入番号 29786
分類 375.98 M

12

安喜常

c. okamoto

目録

第一課　九十の春光……一
第二課　春の草……五
第三課　デンマークの農業……七
第四課　ペスタロッチ……二十二
第五課　文字……二十九
第六課　鳥の聲……三十五
第七課　思出……三十九
第八課　噴油……四十三
第九課　農村視察……五十
第十課　蛙……五十三
第十一課　果樹試作場……五十九
第十二課　租税……六十五
第十三課　阿閉掃部……七十
第十四課　水と風景……七十四
第十五課　天然記念物……七十七
第十六課　會社……八十四
第十七課　市兵衛の話……八十七
第十八課　夏の曉……九十一
第十九課　土に立脚せよ……九十四
第二十課　夕立雲……九十九
第二十一課　地震……百六
第二十二課　日本の風土……百十二
第二十三課　十和田湖の養魚(一)……百十六
第二十四課　十和田湖の養魚(二)……百二十二
第二十五課　罐詰……百二十九
第二十六課　川柳……百三十四
第二十七課　待賢門の戰……百三十六
第二十八課　兒島農場……百四十一
第二十九課　晩鐘……百四十六
第三十課　樂地……百五十二

高等小學讀本　卷三

第一課　九十の春光

秋の風は泣くなり。冬の風は怒るなり。春の風は笑ふなり。

春の風の吹く處、そこにあわ雪消えて若菜もえ、谷川の氷解けて波の花先づ咲く。枯木活きて芽を吐き、燒痕よみがへりてわらびの柔拳空をつかまんとす。二十四番の風吹盡くして、梅咲き、桃咲き、櫻咲き、九十の春光到る處駘蕩として春の海の如く、人は花に送られ花に迎へられて、心自らのどかなり。

○櫻の眺め

梅や、桃や、梨や、李や、果實あるが故に牆籬の中にとざさるゝも、櫻は幸に食はるべき果實をもたず。野に山に、到る處春を飾る。これ櫻ならでは得べからず。又日本ならでは求むべからず。我が日本を櫻花國とは、いひ得て切なるかな。

櫻は多きをよしとす。一目千本、滿山皆櫻、朝陽と相映發す。何等の美觀ぞや。されど人跡絶えたる山奥、清水ちよろちよろと流るゝあたり、其のこずゑとも見えざりし一本の櫻の、花にあらはるゝも亦興ならずや。

散るを惜しむは、櫻を愛する所以にあらざるべし。一陣

の春風に、千片また萬片、惜しげもなく枝を辭して、空に香雪をみなぎらし、地に錦繡を布く。櫻は散るさまこそ最も愛すべけれ。

たそがれの雨入相の鐘を傳へて、十里の長堤春漸く老いんとす。知らず、江上の漁翁網し得たる白魚と落花と何れか多き。

○四季路の春景色

菜花一路、胡蝶人と相追ふ。春風の行方それと知られて柳の絲なびくともなく動く處、水車ゆるく回り、はねつるべ音なくして、小犬籬根に眠る。遙かなる桃林の上に塔尖の出づるは、伽藍あるにや。詣でて歸る少女の一群

相和して歌ふ聲、漸く遠く漸く細く、遂に霞の中に消えて行く。

○日西に沈まんとす。一羽のひばり、其の聲をのせ來りて麥生に落つ。淡月一痕、家路に歸る農夫のかつげる鍬にかゝれり。

○春を飾るものは第一に花なり。天地美裝す。第二に鶯・歸雁・ひばりなり。自然の音樂をなす。第三に暖氣なり。寒からず暑からず、心自ら草木と共にゆるぶ。第四に霞なり。日光之に當りて景致やはらぎ、月影之に映じて夜色更に幽なり。

○春雨の趣

春雨亦春の一觀たらずんばあらず。大空は霞むとも雨降るとも未だわかぬ間に、青柳の絲はや玉ぬきそむとは、契沖の詠ぜし所、蓑着て下す筏師に霞む朝の雨を知るとは、千蔭の歌に入りし所なり。降るとも見えぬ雨に、黄塵をさまり俗客去りて、天地自らしめやかなり。閑窓の下、靜かに机に對して一層の幽寂を感ず。（天町芳衛「桂月全集」ニ據ル）

第二課　春の草

一

もえよ、もえよ、春の草、
生ひよ、生ひよ、野邊の草、
新し夢をはぐくみて
春の命をのばせかし。

二

長き眠の冬の土
何時しか覺めて蘇り、
芽をふく千草・八千草の
生の力の不思議さよ。

三

小川の水はぬるみたり。
日は晴れ、空は薄霞み、
つぐみやひわや鶯や、
のどかに遊ぶ卯月の日。

四

もえよ、もえよ、春の草、
生ひよ、生ひよ、野邊の草、
綠のしとねを敷きつらね、
若き命を飾れかし。

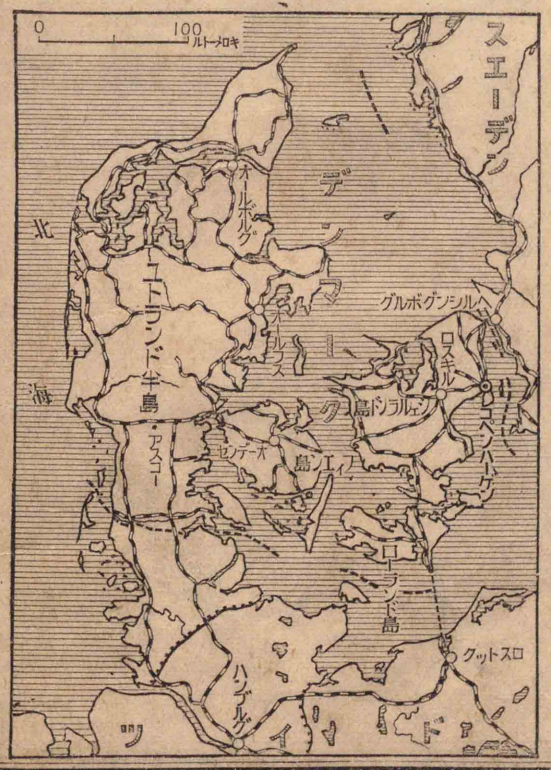
（三木操「青き樹かげ」ニ據ル）

第三課　デンマークの農業

四月十五日午前十時、コペンハーゲンの中央停車場を

發してベルリンへと向つた。昨夜ホテルで相識になつた杉田農學士が、同じ汽車でハンブルグへ行くといふので、これ幸と同行する。異境萬里のはてに、偶然にも同國の友を得て、暫し旅を同じくするのはいひ知らぬ喜であつた。

水清らかに森秀でたコペンハーゲンの市街は何時しか盡きて、次第に平和な田園が車窓に映ずる。春は既に此の北歐の地にも

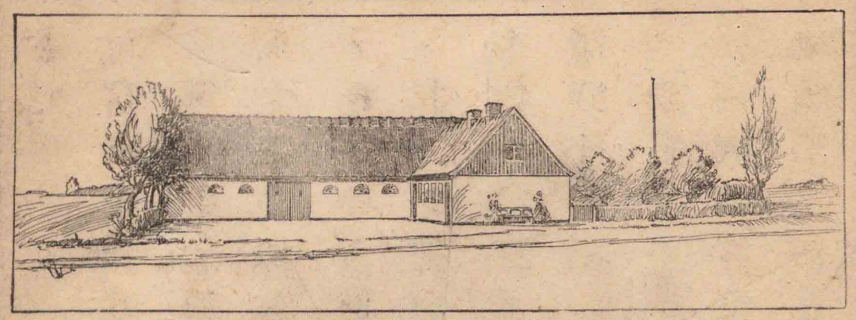


訪れて來た。降るやうな陽光の下に、草屋白壁の農家が點々として輝く。灌木は既に芽を吹いて、嬉しい緑の色を見せてゐる。沼あり、水青く、森あり、こずゑが春の空に煙つてゐる。農場には白馬に鋤を引かせて悠々と耕してゐる農夫がある。たまく二頭三頭に引かせたのも見かけた。うら若い妻が、夫を助けてかひ〴〵しく土を反してゐるのもある。農村の溫かい情景は、何れの國にも略共通な趣があるとしみ〴〵思はせられた。

杉田君は久しく此の國に滯在して、普く農村を巡歷し、此の國の農業を子細に研究した人であつた。お陰で私は同君からデンマークの農業の概況を聞くことが出

來た。

同君の談によると、デンマークには自作農が非常に多く、全國農家約二十萬六千戸の中、十九萬戸がそれである。中には非常に大きな農場を所有する大農もあるが、それは寧ろ特殊の例で、官民共に期待してゐるのは專ら中農・小農である。殊に西暦千八百九十九年には自作小農創定法、千九百十九年には新小農地法が制定され、政府は農家に低利資金を融通して土地を購はしめ、以て模範的の小農を設定することに力めた。一般に小農といへば、各戸大抵五十アールから十數ヘクタールの地面を所有し、それに乳牛・鷄・豚を飼ひ、傍、農耕にいそし



んでゐる。

「御覽なさい、あゝいふ風に、家は皆密集しないで離れ〳〵になつてゐます。家の周圍には樹木が植ゑてある。これが夏ですと綠に茂つて、一叢々々散在するのが美しく眺められます。家の附近に耕地があり、耕作物は麥類・根菜類・馬鈴薯・牧草等で、大部分は家畜の飼料になるのです。一戸に少くとも二三頭乃至六七頭の乳牛を飼つてゐます。しぼり取つた乳は、器に入れて路傍に出し

て置くと、運搬車がそれを集めて、組合の製酪所へ運びます。製酪所では、集めた牛乳から主としてバタを製造し、脱脂牛乳は直に又各農家へ送り返す。農家は之を飼料として、各家少くとも六七頭の豚を飼つてゐます。其の外大抵どの農家でも耕馬一二頭、鶏數十羽は必ず飼養してゐるのです。」

車窓に映ずる田園を指摘しながら、杉田君は要領よく説明する。

「それで此の國に飼養する家畜は、牛が約二百八十萬頭、豚が三百十萬頭、馬が五十五萬頭、羊が二十三萬頭、鶏が一千九百萬羽です。面積からいふと僅か我が四

國の二倍半程の小國に、かういふ多數の家畜がゐるのです。さうして家畜や、家畜から生産する肉・ベーコン・バタ・チーズ・煉乳・鶏卵等を輸出する高が、年額七億九千萬圓に上つてゐます。」

小國の農産物の輸出高がやがて八億圓に及ぶとは、誠に羨むべきことである。

車窓には、田園が盡きて美しい入江が現れ、やがて其の入江に臨む小都市が展開した。汽車は此處に停車せず進行を續ける。

「今のはロスキルといふ處です。私は去年の夏暫く此處に滞在しました。此處には附近の農村の爲に設け

られた組合の屠殺場があつて、一年に約九萬頭の豚をベーコンに造ります。其の他組合の種子精選所などがあります。」

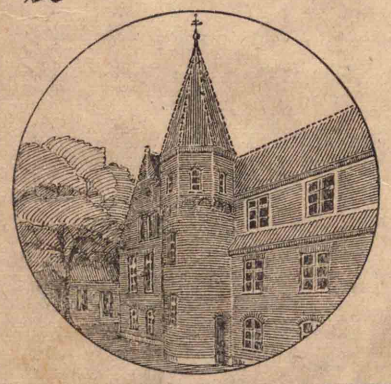
之を絲口に、談は産業組合のことに及んだ。――デンマークの農業が、かくまでに發達し隆盛になつたのは、各農村が組合を組織して、生産の增進を圖つたことにある。諸外國に於ける産業組合は、多く市民の爲の購買組合から發達したのであるが、此の國では寧ろ農民の手に成る生産組合が著しく發達普及したのであつた。バタを造るにしても、各農家で經營するのは不經濟であり、殊に品質が不良で、不統一である。そこで各農村に

組合の製酪所が出來、附近の農家の牛乳を集め、進んだ機械と技術で製造するやうになつた。今日全國を通じて此の種の組合數が一千以上に及び、優良なバタやチーズを製造して、盛に國外へ出してゐる。此の外ベーコン製造組合・鷄卵輸出組合・畜牛輸出組合等が各地に組織され、それらが皆盛に活動してゐる。

「デンマークの今日の繁榮は全く産業組合の賜です。しかし組合は人を待つて始めてほんたうのものが出來る。此の點から、私どもは此の國の教育を考へてみねばなりません。」

彼の談は教育に移つた。――デンマーク獨得の教育

はよく人を作つた。即ち一方に國民高等學校があり、他方に農學校があつて、農家の青年子女を教育してゐる。何れも特殊の、しかも短期の學校で、前者は歴史・國語・音樂・體操等を主要學科として、グルントヰの主唱した、眞實・高潔・純眞を愛する人格の養成に力め、後者は主として農業の實科的學理を授ける。小學校卒業後三四年農事の實際に携はつた者が、先づ國民高等學校に入り、次いで農



學校に入るのを普通とする。此の二者の教育を併せて、始めて純な、まじめな、しかも科學的の知識技能を有するデンマーク農民が出來るのである。

「實際此の國の農民の極めて純な心に接すると、涙が出る程嬉しく思ふことがあります。去年の九月のことでした。或日私はロスキルに近い村の農學校を訪ねた後、其の邊の情況を見がてら、一人で村の道をたどりました。夕日傾く農場に、牛が悠々と牧草をあさつてゐる平和な景色を眺めながら、とある農家の前にさしかゝりました。すると其の家の娘さんらしい人が、折から門外の果樹の下で、實を拾ひ集めてゐま

したが、私が通りかゝるのを見ると、親切にもそれを分けてくれるのです。見ず知らずの外國人に果實を分けてくれる純な心を、私はどんなに嬉しく思つて、それを受けたことでせう。それから又暫く行くと、向ふから二人の青年が來る。彼等は私とすれ違ふ際脱帽して丁寧に會釋しました。私はかういふ青年がある以上、デンマークの農業は益〻多望であるとつくづく感じたことでした。」

窓外には相變らず平和な農村が眺められる。今までの話を聞いて田園を見ると、成程とうなづかれることが多かつた。點々として散在する瀟洒な住宅・畜舍があり、

耕地は四五十アールぐらゐに仕切られ、其處に種々の耕作が行はれる。畜産を主としながら、人は孜々として農耕を營んでゐる。折々は春の空に風車が悠々と廻つてゐるのも異國らしい風景であつた。聞けば、これは我が國の水車が米を搗くやうに、麥をひき割つたり、おしつぶしたりするのだといふ。

「しかし今でこそ世界に有名なデンマークの農業も、約六七十年前には、悲境のどん底に陥つた

ものです。」

談は歴史に移つた。――其の頃までデンマークは穀作を主としてゐた。ところが追ひ〳〵新大陸のアメリカから廉價な穀物が輸送されるやうになり、隨つてヨーロッパ諸國の市場に於ける穀物は、暴落に暴落を重ねた。そこでデンマークの農業は一大打撃を蒙つた。のみならず、當時デンマークは國勢が振るはず、加ふるに洪水・旱魃等の天災までが見舞つて、一時は國を擧げて破産するかと思はれた。

此の悲境からデンマークが今一度浮かび上ることを得たのは、決して貴族や政治家の力でなく、實に農村から出た新しい力であつた。農民は固く期して悲境のどん底から奮ひ起つた。徒に輸入穀物と競爭するのは愚である。彼等は毒を以て藥とする方法を採つた。即ち廉價な輸入穀物を以て畜産に力を盡くした。しかも耕地を牧場化せず、畜産と農耕とを併せ、小規模な集約農法を營んで、家畜を飼養し改善すると共に、他方に普く組合を結んで、優良品の製造販賣に力めた。かくの如くにして、デンマークは過去半世紀の間に全く其の面目を一新し、今日の隆昌と幸福をかち得たのである。

杉田君の熱心な話に、私も知らず〳〵興奮を覺えながら耳を傾けてゐた。

汽車は一路南へ走る。時計を見れば既に正午に近い。シュルランドの島を走り盡くすのも、あと二十分ばかりであつた。

第四課　ペスタロッチ

山水の美を以て鳴るスイスのチューリヒ市街頭に、粗服をきとへる一人物の、貧しげなる兒童を伴なひて立てる銅像あり。これ教育界千古の偉人ペスタロッチを記念せるものなり。

ペスタロッチは西暦一千七百四十六年を以てチューリヒに生まれ、六歳父を失ひ、母の手一つに育てらる。幼き時より品性純良にして、人を愛するの熱情に富み、長ずるに及びて、救世濟民の念頗る盛なり。初め僧たらんと志して得ず、法政の學を修めしかども亦成らず、次いで荒蕪の地を開墾して貧民に産業を授けんことを企てしが、此の事業も亦失敗に歸し、其の全財産を失ふに至れり。こゝに於て一種の學校を作り、貧民の子弟を集め、農業に從事せしむると共に教育を施ししが、兒童の多くは怠慢にして勤勞をいとひ、食

にあき暖を得れば遁走を企つる者さへ少からず。誠意に出でたる此の事業も、却つて非難の聲を以て報いられ、遂に學校を閉づるのやむを得ざるに至れり。しかも堅忍不拔なるペスタロッチは、毫も失望することなく、自ら思へらく、此の失敗は余が計畫の粗漏なりしことを悟らしめたりと。これより蟄居十八年、專ら文章を以て世道人心に益せんことに力め、一書を著して、教育の淵源は家庭にあり、家庭の中心は母にあり、母賢なれば家とゝのひ、一家とゝのへば一鄉治り、延いて全國の民風自ら純良の域に進むべしとの意を寓せり。此の書忽ちフランス・ドイツの諸國に傳はり、人をして教育のゆるかせにすべからざるを知らしめたり。プロシヤの王妃ルイゼ、嘗て難をロシヤに避くるの途、之を讀みて曰く、「我若し自由の身ならんには、自ら往きて此の人を訪ひ、全人類の名を以て深謝の辭を述べんものを。」と。

當時スイスも亦フランス大革命の餘波を受け、戰亂處處に起り、家を燒かれ親に離れて流離する者多く、スタンツの町特に甚だし。ペスタロッチ卽ち單身スタンツに赴き、廢寺を以て學校とし、專ら兒童の教育に從事せり。此の時住民の窮乏は實に其の極に達し、子弟の教育の如きは何人も之を顧みる者なかりしかば、百方勸誘して八十人の兒童を得たり。其の中には、手足悉く吹出物

におほはるゝあり、全身にしらみのたかれるあり。ペスタロッチは毫も之をいとはず、常に兒童と起居寢食を共にし、夜は兒童の熟睡するを見て始めて寢に就き、病に罹る者あれば、看護到らざる所なし。其の心勞察するに餘りあり。幾何もなくしてスタンツは再び戰場となり、其の學校は戰

時病院として收用せられ、ペスタロッチはやむを得ずしてブルグドルフに移れり。

ペスタロッチのブルグドルフに至るや、自ら請ひて其の地の貧民學校の補助教師となりしが、同僚の忌む所となり、イバーダンに移れり。此の頃に至りて、ペスタロッチの精神的事業は漸く社會の注目する所となり、學者・教育家はいふに及ばず、貴人の來り訪ふ者相次ぎ、ヨーロッパ諸國の政府も亦視察員を送るに至れり。ペスタロッチ大いに感奮し、老の其の身に至るを知らず、朝は二時に起き、先づ筆を執りて著述に從ひ、然る後課業に臨み、參觀の客到れば、諄々として說明して毫も倦むことなか

りき。斯くて西暦一千八百二十七年、八十二歳にして歿せり。

ペスタロッチの一生は、奮鬪努力の歴史なり。而して其の逸事の傳ふべきもの亦少からず。フランス公使の嘗てイバーダンの學校を參觀せし時なりき。當時ペスタロッチは劇烈なる關節炎を患へて床中に在りしが、病を力めて各教室を案内し、熱心に説明せしに、何時しか病苦を忘れて、遂に健康を回復せりといふ。又ロシヤ皇帝に謁見して教育の意見を述ぶるに當り、身の貴人の前に在るを忘れ、席を進めて帝の衣端をつかまんとして顚倒せしことあり。又或冬の日、乞食のはだしにて窓下を過ぐるを見、直ちに己が靴を脱ぎて之に與へ、己は藁を編み足にまとひて登校したりといふ。

ペスタロッチの偉大なるは、其の學術にもあらず、其の事業にもあらずして、實に其の精神にあり。彼は眞に人を愛せり。而して眞に人を愛するの道は、善く之を教育するにあるを信じたり。此の愛情と信念とを以て、終始一貫、心身を捧げて教育の爲に盡くしなり。チューリヒ市街頭、行人旅客をして其の像下に低回俯仰せしむるもの、眞に故なきにあらず。

第五課　文字

我等が、前代の事を知り、現時の世態を悟り、又廣く思想

高讀農三

を社會に通じ、更に之を後人に傳へることの出來るのは、一に文字の賜である。文明が時代を追うて次第に進歩するのは、其の大半は之を文字の功に歸しなければならない。

文字とは、思想を書記する符號であつて、しかも多數の人の間に認められ、共通に用ひられるものである。太古、人は繩を結んで約束のしるしとしたことがある。今でも野蠻人の中には、樹枝を切つて種々の長さとし、通信・備忘の用に供するものがある。しかし是等はまだ文字と稱することは出來ない。文字として認む

べきもので最も早く發明せられたのは、楔（くさび）形文字及び漢字・エジプト文字である。楔形文字はアジヤの西部に行はれたもので、今は僅かに古い碑などに殘つてゐるに過ぎないが、漢字やエジプト文字は其の後大いに發達變化して、現今世界の主なる國に行はれる文字となつた。

漢字には、日・月・山・水・魚・鳥・木のやうに、物の形に象つて作つたものも

高讀農三

あり、木の上に一畫を加へて末、下に一畫を加へて本の意味を表したやうなものもある。木を二つ合はせて林、三つ合はせて森とするが如き、又日と月を合はせて明とするが如きは、數字を合はせて一つの意味の文字を成すのである。各に宇冠又は木偏を添へて客・格とし、官に竹冠又は食偏を添へて管・館とする如きは、各特殊の意義を示すけれども、其の音は元の各・官によつて示されてゐる。漢字の構造は種々である。

我が國は古く支那の漢字を輸入し、之を用ひて物事を記してゐたが、後、假名を製作して、漢字とあはせ用ひるやうになつた。片假名は漢字の一部分を割いて作つたものであり、平假名は漢字の草體から發達したものである。

漢字はもと物の形に象つて作つたものであるが、其の後時代と共にいろ〳〵に發達變化して、今では其の由來のわからないものが多く、字數も五萬を超えてゐる。エジプト文字も漢字と同じく、物に象つて作つたものであるが、其の後著しい發達を遂げなかつたため、終に繪畫の域を脱するに至らなかつた。しかし其の影響は甚だ大なるものがあつて、今日ヨーロッパ及びアメリカ諸國で用ひるローマ字も、此のエジプト文字から變化したものである。

A	a	𝒜	𝒶	N	n	𝒩	𝓃
B	b	ℬ	𝒷	O	o	𝒪	𝓄
C	c	𝒞	𝒸	P	p	𝒫	𝓅
D	d	𝒟	𝒹	Q	q	𝒬	𝓆
E	e	ℰ	ℯ	R	r	ℛ	𝓇
F	f	ℱ	𝒻	S	s	𝒮	𝓈
G	g	𝒢	ℊ	T	t	𝒯	𝓉
H	h	ℋ	𝒽	U	u	𝒰	𝓊
I	i	ℐ	𝒾	V	v	𝒱	𝓋
J	j	𝒥	𝒿	W	w	𝒲	𝓌
K	k	𝒦	𝓀	X	x	𝒳	𝓍
L	l	ℒ	𝓁	Y	y	𝒴	𝓎
M	m	ℳ	𝓂	Z	z	𝒵	𝓏

楔形文字・漢字・エジプト文字の如きは、物の形に象った文字であるから、象形文字といひ、又一字がそれ〴〵意義を有するから、意字ともいふ。假名及びローマ字の如きは、もと象形文字から發達したものではあるが、音のみを表す文字であるから、音標文字又は音字といふ。音標文字はそれ自身には意味は無いが、それによつて言語を書表すことが出來る。

第六課　鳥の聲

寢床を出ると、琵琶湖の見える部屋に行つてみる。朝日が部屋一ぱいにはいつてゐる。

湖水と思はるゝ邊は、雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂

上から雲海を見下したのと似た景色だ。部屋の下は東谷で、我が目よりやゝ高くやゝ低く、數知れぬ杉のこずゑがほこのやうに突立つてゐる。左手には、北谷の向ふに當る峯がのこぎりの齒のやうな杉を背に並べて、湖の方に流れてゐる。空氣が清い上にも清いので、近景の杉のこずゑも遠景の杉の峯も、新鮮な色をしてゐる。さうして其の間を薄い霞が流れてゐる。非常に靜かだ。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えぬ。唯此の天地を我が物顔に鳴きさへづつてゐるのは、小鳥だ。何といふかはゆい聲の小鳥があるものであらう。名がわからぬのが殘念だ。其處の杉のこずゑで一羽鳴いてゐる。向

ふの杉のこずゑで他の一羽が答へてゐる。又遙か向ふの谷深く他の一羽が應じてゐる。よく耳をすますと、尙二三羽の聲が何處かで聞えるやうだ。此の小鳥の合奏を破るやうに、他の聲の小鳥が突然其の間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲ではないが、又りゝしいところがあつて、其の音の空山に響く趣が何ともいへぬ。これも名がわからぬのが殘念だ。それも一羽ではない。三羽、四羽と、聞く中にだん〳〵殖えてくる。前の小鳥の聲が縱絲なら、此の小鳥の聲は横絲だ。互に入りまじつて、よく調和を保つところがおもしろい。突然けんけんけんと、けたゝましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響け

ば、彼方の峯にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりもやゝ急調だ。或は山鳥であらうか。前の二つの小鳥が織成した美しい絹を、唯一聲に引割いたのかと疑はれる。しかし暫くして、其の聲は谷の底の底、峯の奥の奥にしみ込んでしまつて、其の後は元の通り靜かになる。眞先に其の靜かさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれるかすりのやうに美しい。一のかすりが置かれると、又縱絲を織つて前の小鳥が鳴く。又横絲を織つて次の小鳥が鳴く。かすりが鳴く。縱絲が鳴く。横絲が鳴く。此の絹を又山鳥の聲が破るのかと思ひながら待ちまうけてゐると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似てゐて、谷の堂の鰐口が口を明いてつぶやくのかとも疑はれる。他の鳥の聲が皆高調で晴々とした中に、獨り低調で不平らしい音を出すのがおもしろい。一人の友はきつゝきだらうといつた。他の友は山鳩だらうといつた。

琵琶湖の上には、まだ漠々たる白雲がたゞようてゐる。杉のこずゑを流れる霞は少しづつ薄らいで來て、だんだんと谷が深く見えてくる。（高濱清「新寫生文」ニ據ル）

第七課　思出

春の夜は靜かに更けぬ。
うまや路の並木のけぶり、

箱馬車はわだちをどりて、
宮津より由良へ急ぎぬ。

おぼろ夜の窓のあかりに、
京むすめ・難波あきうど、
尼法師や、切戸まうでや、
人の世の旅の道づれ。

物語、あくびまじりに、
眠り目のとろむとすれば、
誰が子にか、後の方に

をりからの追分節や。

清らなる聲ひとしきり、
谷あひにさゝらぐ水の、
咽び音に響き渡れば、
乘合は涙こぼれぬ。

月落ちてやみの夜ぶかに、
箱馬車は由良に着きけり。
人々は車を降りて、
西東、路に別れぬ。

高讀農三

其の後や幾春經けん、
おほ方は夢にうつゝに、
忍びてはえこそ忘れぬ、
由良の夜の追分上手。

其の子今いづくにあらん。
思出の清きかたみや、
人々の心に生きて、
とことはに姿ぞ若き。

（薄田淳介「二十五絃」ニ據ル）

第八課　噴油

一行の乘つた列車は、やがて西山停車場に着いた。油田は停車場から三四丁、一同は勢揃して其の方へと出かけた。行く〳〵案内の人の語るを聞けば、此處の第四號井といふのは、ちやうど熱海（あたみ）の大湯のやうに、一日に十四五回、時を定めて石油が自然に噴上る。平生は油の逃げんことを恐れて、口をふさいで横の方へ油を吐出すやうにしてあるが、今日は珍客への御馳走にとて、口を明けておいてある。何時も二時か二時半頃に噴出すのが、今日に限つて折よく時が後れて、まだ噴出さぬところを見ると、ちやうど先方へ着く頃に噴出すかも知れ

高讀農三

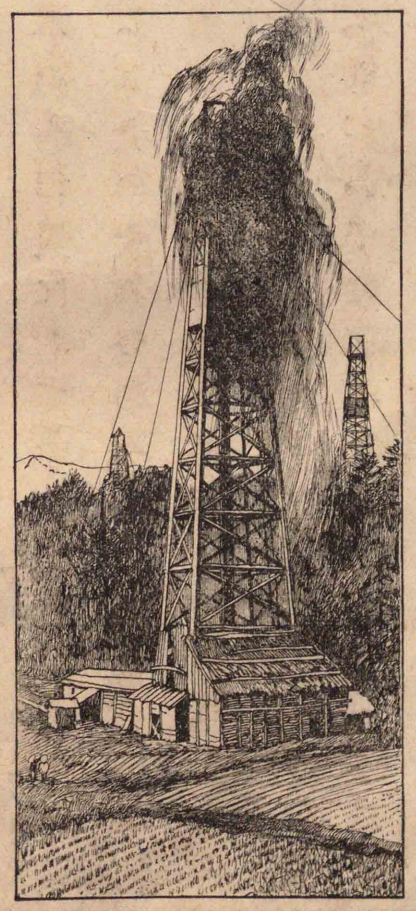
ぬとのことであつた。

時計を見ると、三時少しまはつてゐる。思へば去んぬる明治二十六年六月二十六日の午後三時、加津保澤の油井が突然油を噴上げ、地に溢るゝこと方五十間に及び、一晝夜に汲取るところ一千樽にして、尙油の置場に困つたといふ話がある。それ以來、石油自噴のことは諸方で時々傳へられたが、未だ親しく見たことはない。何だか樂しみなやうな心配なやうな氣がして、微かに胸の打騷ぐを覺えた。

忽ち「それ、出た。」と誰やらの呼ばはる聲が聞えた。ちやうど途中で、井戸櫓を建てるところ、それから井戸を掘る

ところ、掘終つていよ〳〵汲出すところなど、順々に見てゐる時であつた。すはやとばかり人々の指さす方を見やれば、如何にも、油ににじんで黑くなつた第四號井の櫓が、赤土の小山を背景にして、すつくと立つてゐる。其の下の方から、赤犬の大きなのが、頭を振りながら何物かにざれ狂ふやうにうごめいてゐるのが見える。と見る間に、これがだん〳〵高くなつて、赤ちやけた大蛸が、頭をのべ脚をもがいて、によろ〳〵と飛上りかけては落ち、また飛上りかけては落ちるやうな樣になつて來た。それが落ちてまた上る毎に、一尺、二尺、一間、二間と、だん〳〵高くなつて行く。油が今し噴騰しかけたとこ

ろである。一同は一語なく、どうなることかと眼を見はつて見てゐる。油はだん〳〵に落ちては高まり、落ちては高まる。其の邊に立働いてゐた人夫は、手に〳〵菰をかぶり笠をかざして、右往左往に逃惑ふ。一天俄にかき曇つて、沛然として驟雨の將に至らんとするとき、先づぽたり〳〵と大粒の雨が先驅となつて落ちて來たときの光景を思はせる。



且落ち且上る間に、赤犬の頭が蛸の脚のやうになり、更に上つては、古い草雙紙の繪などにある波の花のやうに、粒々が小さく分れて、色は代赭から茶褐色に代つて、次第に黄色に薄れて行く。やがて一ゆりゆつてふつと立つよと見れば、やゝ垂れ氣味であつた頭を急に立て直して、十五間の井戸櫓を、黄龍の天に昇るが如く、物の見事に突拔ける。それが又一ゆりゆれば、油は色白くぼけて、櫓の上六七間の高さに立上り、末は雲の如く霧の如く風のまに〳〵たなびいて、餘瀝さら〳〵と下なる板屋の屋根を打つ。並みゐる一同は、思はず手をうつて、歡呼の聲を上げた。山上山下、鑛場の彼方此方から拍手

の音が聞える。身を挺して櫓の下に近づけば、噴出づる油は轟々と地響し、落下る油は夕立のやうに降りかゝる。

噴上ること約十分、最高二十餘間に達してからは、又次第に下つて、雲霧は黄龍となり、波の花となり、蛸の脚となり、赤犬の頭となつて、はては跡もなく消えてしまふ。消終つて十分とたゝぬ中に、又そろ〳〵と上りかけて、且下り且上る。二度目は前にも増して勢猛に、其の響も物々しい。大抵は二回にして終るさうだが、これで噴出する油の量は約二十石といふ。

此の井戸が出來て以來、最も多い時は一日に四百十二

石、少い時でも三百十四石取れた。先月二十三日のことか、一度油の噴上つた時、どうした拍子か、之に火がついて炎々と燃上り、さながら火柱の立つたやうに、四時間半燃續けた。其の火先が柏崎からも見えたといふ。初から火氣を絶つてはゐるが、それ以來人夫もあぶながつて、今日井戸口を明けるにも、危險だとて大分反對があつたといふ。

噴油が終ると、雨のはれ間を待ちかねたやうに、菰をかぶり蓆をかざした人夫が、續々歸つて來る。其の中には、ほゝかぶりした若い女が、柄の長い柄杓をもつて、ともすればよそに流れんとする油を汲んでゐるものもあ

東京帝國大學

る。

一行は更に導かれて、他の方面の見物に向つた。（移村廣太郎「ひとみの旅」に據る）

第九課　農村視察

拜啓先日出發の際は種々御懇諭を蒙り候のみならず御紹介狀御名刺等を賜はり御厚情謝し奉り候一昨日當地着は豫定の通り夕刻に相成候が瀨川樣わざ〳〵停車場まで御出迎へ下され何かと御世話に相成り申候

當地視察は瀨川樣の御案内により先づ養鷄組合の活動を見申候此の組合にては鷄種の改善飼料の研究に力むるは勿論人工孵化人工育雛鷄卵共同處理等の事を營み以て一般農家の養鷄を指導し收益の增加を圖り居候集卵所の設備鷄卵共同販賣所の活躍等實に一驚に値するものこれあり候今や當地の鷄卵は東京市あたりの市場に於て聲價高く需要甚だ多き由に候斯くて鷄卵鷄肉羽毛等より生ずる收入を合すれば一戸あたりの純益年百數十圓農家の副業としては頗るめざましきものに御座候組合の組織と經營法とを一考すれば我が村にても多大の收益を得べ

きものと存じ熱心に調査致候
次に麥稈眞田の編方こんにやくの栽培も一見致候是等は取立てて申す程のことにはこれなく候へども參考に相成候點も少からず候尚序に村營の簡易圖書館も參觀致候農事の改善副業の指導奬勵もさることながら智德を修めて世界の大勢に應じ品性を陶冶するは今日の農民に最も必要なることと存候巡回文庫の外に見るべき設備なき我が村にも斯くの如き圖書館の設立せられんこと切望に堪へずしかも其の實現はあながち至難

の事にこれあるまじく候
明朝一番列車にて石岡に向ひ來る二十日歸村の考に御座候先づは御禮かたゞ〳〵當地視察の大要のみ申述べ候瀬川樣へは御序の折宜しく御禮願ひ上候敬具

年　月　日

田代喜太郎
畑　謹一

豐田耕一郎樣
御座右

第十課　蛙

春は空から、さうして土からかすかに動く。毎日のやう

に西からほこりを卷いて來る疾風が、どうかするとはたと止つて、空際にはふは〳〵とした綿のやうな白い雲が、動きもしないでじつとしてゐることがある。水に近い濕つた土は、暖い日光を思ふ存分に吸ふ。田圃の榛の木のつぼみは、目に立たぬ間に少しづつ延びて、ひらひらと動き易くなる。蛙はまだ蟄居の狀態に在りながら、稀にはそつちでもこつちでも、くゝ〳〵と鳴き出すことがある。

空からさす日の光はそろ〳〵と熱度を增し、土はそれを幾らでも吸うて止まぬ。堀の邊には、蘆やとだしばやの他の草が、すつきりと首をもたげる。やはらかさに

滿ちた空氣を更に鈍くするやうに、榛の木の花はひらひらと絶えず動きながら、すゝのやうな花粉をまき散らしてゐる。蛙は假死の狀態から覺めて、やはらかな草の上に手を突いては、驚いたやうな樣子をして空を仰いで見る。さうして彼等はあわてたやうに聲を放つて、其の長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。彼等は更に春の到つたことを、一切の生物に向つて促すやうに告げる。草や木が其の活力を存分に發揮するのを見ない中は、鳴くことを止めまいと力める。

田圃の榛の木はとうに花を捨てて、自分が先に若葉の姿になつて見せる。黃色味を帶びた若葉が、さわやかな

朝日を浴びて快い光を保ちながら、周圍のまだたゆたうてゐる林を見る。それらの林は、漸く其の本性のまに、白つぽく、赤つぽく、黄色つぽく、いろ〳〵に茂つて、さうして最後に急いで一つの深い緑になるのである。雑木林の其處ら此處らに散在してゐる開墾地の麥も、すつと首を出し、そらまめの花も、可憐な黑いひとみで、恥づかしさうに葉の間からこつそり四方をのぞく。林の間には、薄の葉が空を刺さうとして立つ。其の麥や薄の下に巣をくふひばりが、時々空を占めて、春が更けたと呼びつゞける。さうすると、自分等の仲間の聲のみが空間を支配してゐるべきだと思つてゐる蛙は、ひばり

のさへづる聲を壓し去らうとして、互の體を飛越え飛越え鳴き立てるので、小勢なひばりはすつとおりて、麥や薄の根に潜んでしまふ。

總べての樹木や總べての雑草が爪立して、唯空へ〳〵と暖な光を求めて止まぬ。土がそれをじつと引きとめて放さない。そこで一切の草木は、土と直角の度を保つてゐる。人も土に直立して、手に〳〵農具を執る。紺の股引を藁でくゝつて、皆耕し始める。

田の水が欲しいと人が思ふ時、蛙は一齊に、裂けるかと思ふ程喉をふくらし、身をゆるがしながら、殊更に鳴き立てる。白いすが絲のやうな雨は、水が田に滿ちるまで

は注いで又注ぐ。刈株を引つ反しく働いてゐる人々の周圍から、足下から迫つて、蛙は敏捷に其の手を動かせ動かせと促して止まぬ。蛙がぴつたりと聲をのむ時には、日中の暖さに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草の上にごろりと横になる。

更に夜になると、蛙は如何に自分の聲が遠く且遙かに響くかを誇るものの如く、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢると、蛙の聲はめつきり遠く隔たつて、それがぐつたりと疲れた農夫の耳をくすぐつて、彼等を安らかな眠に誘ふのである。熟睡によつて、農夫は皆短い時間に肉體の活力を回復する。彼等が、雨戸のすきまからさす夜明の白い光に驚いて蒲團を蹴て外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲に促され、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を呼返すのである。

草木はまた遠く遙かに響けと鳴く蛙の聲にゆすられつゝ、夜の間に生長する。櫟や楢や其の他の雜木は、蛙が鳴けば鳴く程、又それが鳴き止む季節までは、幾らでも繁茂することを繼續する。さうしてしばくしとくと降る雨が空の靑さを移したかと思はれるやうに、深い綠が地上をおほうて、さわやかな涼しい陰を作るのである。（長塚節「土」ニ據ル）

第十一課　果樹試作場

こゝに一つの茅屋がある。なだらかな曲線で形づくられた小高い岡が、波のやうにうねつて東から西へ、或はそれが分れて西南へ、また西北へと無雜作にはひながら、幾重にも折重なつて、穩やかに美しく續く。それ〴〵の岡の麓から中腹へかけての斜面には、檜・松・栗又は竹林に交つて、桃や梨の畠が點々と眺められる。今は總べて一つ綠の衣に包まれてゐるが、三月には薄赤く、四月には純白に、それらの岡はあてやかな裾模樣を着けたに違ひない。かういふ岡の一つの、桃畠・梨畠の間に其の茅屋は立つてゐる。丸木で組まれ、茅で葺かれたさゝやかな其の家は、入口にかゝげられた「果樹試作場」の標札と、部屋の片隅に「農場管理法」「果樹栽培法」などいふ書物が見えなかつたなら、全く岡の裾の廢屋に過ぎないであらう。其の茅屋に村の一青年が、時折の生活を營んでゐる。

彼が此の家に起き臥しするやうになつたのには理由がある。

岡から岡に續く此の神岡村の小學校は、是もやはり岡の一端の背をならして建てられ、後には綠深い樹林を負ひ、前には、向ひの岡との間に開けた水田・果樹園等をひかへて、先づ兒童に農耕の興味を起させるのに適してゐた。殊に水田・畑・檜林・梅林・竹林・松林・栗林・苺畠・桃畠・梨

畠・柑橘園・蔬菜園等、村の農作の縮圖として造られた三千坪の農園は、郷土の自然・農事に親しませるに足るものがあつた。此の小學校に彼は學んだ。さうしてあたりの岡が紫色に煙る春の日に、まだ八九歳の幼童に過ぎなかつた彼は、其の級友と一しよに、此の農園の一隅の土を反して草花を植ゑ、苺・梅・梨・桃等を植ゑた。また夕日が半天の雲を紅に染める秋の日に、高等科の兒童であつた彼は、先生の指導に從つて試作した農園の野菜を取入れ、水田の刈取をした。土に親しみ農を樂しむ心を彼はかうして早くも養はれた。さうして進んで補習學校に入つた時、其の學校を農事の試驗場とし、研究場とし、自學自習によつて農法や果樹栽培法を工夫することを仕込まれたのであつた。

其の頃村の一先覺者の記念碑が建てられることがあつた。此の村が嘗て貧窮であつた時代に、――それはかの青年がまだ生まれない頃であつた、――果樹の栽培を思ひ立つた或老人が、村の地質を考へ、幾多の辛酸と莫大の犧牲を拂つて、今まで雜木の茂るにまかせてあつた岡の裾に、桃と梨を植ゑたのであつた。今岡の裾の處々に見える桃や梨の畠は、此の老人の希望と努力の實を結んだものに外ならない。村の誇として、其の話は、此の青年も子供の時から聞かされてゐた。さうし

て彼が補習學校に通つてゐた或日、此の先覺者を追慕する村人達によつて、老人が最初に鍬を下した地に一つの記念碑が建てられた。それ以來、桃や梨の花で色どられた飛模樣の綠衣の岡を眺め、或は豐かな珠玉のみのりを目の前に見る毎に、かの先覺者に對する青年の敬慕の心は、一入に深まり行くのであつた。

やがて彼は補習學校の業を終へた。彼は父母の生業を助けると共に、又青年團の一員として、夜の公會堂に藁細工にいそしむことになつた。さうして其の藁細工を賣つて得た收益によつて、共同に購入した多くの圖書を讀破して、新知識を吸收する傍、荒れるがまゝであつた岡の裾を拓いて、桃と梨を植ゑた。それから其の地に茅屋を營んで「果樹試作場」と名づけた。さうして農耕のひまを見ては此處に起臥して、果樹の栽培と改善とに志したのである。

「果樹試作場」はかうして岡の裾に存在してゐる。なだらかな曲線の岡は、今や次第に濃い綠になりまさりつゝ、此の「果樹試作場」の背後に、靜かに橫たはつてゐる。

第十二課　租稅

國民の福利を增進し、安寧秩序を保持するため、國家として爲すべき事業は甚だ多い。是等の事業を遂行する

費用に充てる目的を以て、人民より徴收する財貨を、租税といふ。政府の收入には、手數料・官營事業の收益などいろ〳〵あるが、其の過半を占めるものは、即ち此の租税である。

國家に於けると同樣に、府縣市町村に於ても、各其の地方自治團體の繁榮を圖り幸福を進めてゆくためには、諸種の施設經營が必要であるから、其の費用に充てる目的を以て租税を徴收する。

昔は世界何れの國でも、租税として現品を徴收したり、勞力を賦課したりしてをつたが、此の方法は政府にもまた人民にも種々不便があるので、今日の文明諸國では、皆貨幣を以て之を納めるやうになつた。例へば我が國でも、古く租庸調の制度があり、德川時代になつても、大抵現品又は勞力を賦課して來たが、明治維新以後は、各種の租税は概ね貨幣を以て納めることとなつた。

租税の中で、地租・所得税・營業收益税・相續税・酒造税・關税等、政府の徴收するものを國税といひ、國税附加税・家屋税等、府縣の徴收するものを府縣税といひ、國税・府縣税の附加税、及び戸數割等、市町村の徴收するものを市町村税といふ。

國税には直接税と間接税がある。地租・所得税・營業收益税の如く、直接之を納める者の負擔に歸する租税を直

接稅といひ、酒造稅の如く、之を納める者は製造人であるけれども、實際の負擔は間接に消費者の上にかゝる租稅を、間接稅といふのである。關稅も亦其の性質は後者に屬する。

租稅は、課稅標準を定め、之に一定の稅率を乘じて算出するのである。課稅標準は租稅の種類によつて異なるのであつて、例へば、地租に於ては地價、所得稅に於ては所得金額、酒造稅に於ては酒類の製造石數等の如きものが、課稅標準となるのである。

一家の繁榮するに隨ひ、其の經費が增加すると同じく、國家に於ても、地方自治團體に於ても、其の繁榮に伴なつて經費が膨脹し、國民の負擔すべき租稅の增加するのは、固より當然の事である。我が國に於ても、明治二十七八年戰役前の租稅收入は僅かに七千萬圓に過ぎなかつたが、明治三十七八年戰役後には二億八千萬圓になり、世界大戰後には七億三千萬圓に增加し、大正十五年昭和元年度には實に八億九千萬圓の巨額に上つた。

租稅は國民生活に直接影響するところが大きいから、新に租稅を賦課し又は稅率を變更するには、國稅に於ては帝國議會の協贊を要し、府縣稅・市町村稅に於ては夫れ〴〵府縣會・市町村會の議決を要する。

凡そ納稅と兵役は國民の負擔すべき二大義務である。

我々は、常に國家並びに地方自治團體の隆昌を思ひ、進んで其の義務を果す覺悟がなければならぬ。

第十三課　阿閉掃部

結城秀康越前に封ぜられし後、阿閉掃部とて武功の譽ありし者を、厚祿にて召抱へけり。又狛伊勢とて、これも國にて世祿の歴々なりしが、嫡子に鎧の着初せさせけるに、彼の掃部を招待して、子に鎧着することを賴みけり。さて祝の杯に及びし時、伊勢、「今日は愚息が鎧の着初にて候ふまゝ、御身の御武功の事御物語り候ひて、彼に御聞かせ候へ。」といひしに、掃部、「いや、某が身の上に、御話し申すべき程の武功は覺え申さず候ふ。されど御望もだし難く候ふまゝ、某一生の中に武者振の見事なる士を一人見申して候ふ、其の事を話し申すべし。江州賤嶽の戰に、敵と思しくて後より詞をかけし故、馬を引返し候へば、其の人申し候ふは、『運拙く、今朝より好き敵に會ひ申さず候ふ。御人體を見受け、幸とこそ存じ候へ。不肖ながら御相手になり申すべし。』とて進み寄り候ふ故、『それこそ此方も望む所にて候へ。』とて、互に馬を乘放し、既に槍を合はせんとしけるに、其の人、『しばし御待ち候へ。今朝より雜兵を多く突き候ふ故、槍よごれて候ふまゝ、槍を洗ひ候うて御相手になり候はん。』とて、余吳湖に槍を打

ちひたし、二三べん洗ひ、『さらば。』とて突合ひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮果てて物のあやめも見えずなりぬ。其の時彼方よりまた詞をかけ、『もはや槍先も見えず候ふ。御殘多くは候へども、これまでにて候ふ。御暇申し候ふべし。御名こそ承りたく候へ。某は青木新兵衛と申す者にて候ふ。』とて、某が名をも承り候うて、『此の後又陣頭にて出合ひ候はば、互に人手には懸り申すまじく候ふ。若し又味方になりて候はば、わりなく入魂致し候ふべし。さらば。』とて立別れしが、これ程見事なる武士は遂に見侍らず。如何成果て候ふにや。』と語りけり。其の頃、伊勢が許へ心安く出入する青木方齋といふ浪士あり。其の日も來て勝手に居たりしが、此の物語を聞きて、勝手よりにじり出で、掃部に向ひて、『さても唯今の御物語を承り、今更昔を思ひ出で、涙を落してこそ候へ。其の時の御相手になり候ふ青木新兵衛は、恥づかしながら我等にて候ふ。斯く申すばかりにては、浮きたる事に思すべく候ふ。』とて、其の時の雙方の鎧のをどし、馬の毛色を一々言ひけるが、一つも違はざりければ、掃部驚きて、『さて〳〵久しくて會ひ候うて、本望に候ふ。』とて、手前にありし杯を方齋にさし、之をしるしにとて、腰の脇差を拔取りて贈りけり。それより方齋が名國に高くなりし程に、秀康の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にて召出

されけりとぞ。青木が武者振の見事なるはさる事にて、阿閉が彼が事を言出で、名のり合ひて喜びし、又伊勢が子の鎧の着初に掃部を招きて、子の爲にとて武功の物語を望みし、何れもさしたる事にてはなけれども、其の頃の士風武を嗜みしこと知られたり。（「駿臺雜話」ニ據ル）

第十四課　水と風景

江山の勝といひ、林泉の美といひ、風光の佳麗なる處、水色の添はざるはなし。

四面海をめぐらせる我が國には、到る處長汀曲浦の眺乏しからず。彼の日本三景を始とし、舞子の濱・和歌の浦・三保の松原等は何れも海濱の勝地として名高く、特に瀬戸内海の風光は世界に冠たりと稱せらる。

琵琶の湖水を外にしては近江八景なく、中禪寺湖・蘆湖を除きては日光・箱根の勝もいふに足らざるべし。中禪寺湖の水は懸つて華嚴の瀧となり、はしつて大谷川となり、緑樹紅葉の間に隱見する所、日光山、林谷の美あり。蘆湖より落つる早川の溪流は、玉と碎け雪を噴き、行く行く浴樓の下を廻りて遊人の耳目を洗ふ。

耶馬溪は奇石怪岩を以て聞ゆれども、山國川の此の間を流れて、淵となり、瀨となり、瀧となりて奇觀を添ふるにあらずんば、いかでか鎭西の絶景たる名稱を專らにするを得んや。木曾山中の偉觀は、老樹の欝々として晝

尚暗きにあれども、木曾川の流るゝありて、其の景に光と色とを與ふるなり。月の瀬の梅も水によりて趣を增し、高雄の紅葉も流に映じて錦を漂はす。

れんげさう・たんぽゝの咲滿ちたる春の野を流るゝ一條の水、竹籬の外より入りて石に隨ひて曲折する庭園の細き流、其の景趣を添ふること幾何ぞ。朝日も、夕日も、月も、星も、水に映じて美しく、ほたるも水邊に亂れ飛ぶによりて風情殊に多し。

水の豪壯は天をうつ怒濤に見るべく、地を震はす飛瀑に見るべく、岩石を提げてはしる急流に見るべし。平和は洋々たる春の海に在り。岸遠く山遙かにして、白帆風をはらんで下るの長江に在り。靜寂は水面鏡の如くにして、蘆荻岸に疎に、山禽時に來つて翼を洗ふの沼澤に在り。

第十五課　天然記念物

我々の住んでゐる此の地球上には、數限も知れない天然物が存在する。それ等の中には、學問上から見ても、風致上から見ても、非常に貴重なものがたくさんにあるが、世の中が開けるに隨つて、其の或物は次第々々に毀損されて行く。今毀損の原因の主なものを擧げてみると、其の物の價値がわからないために、知らず〳〵の間に破壞されることもあり、或は不慮の災害によつて損

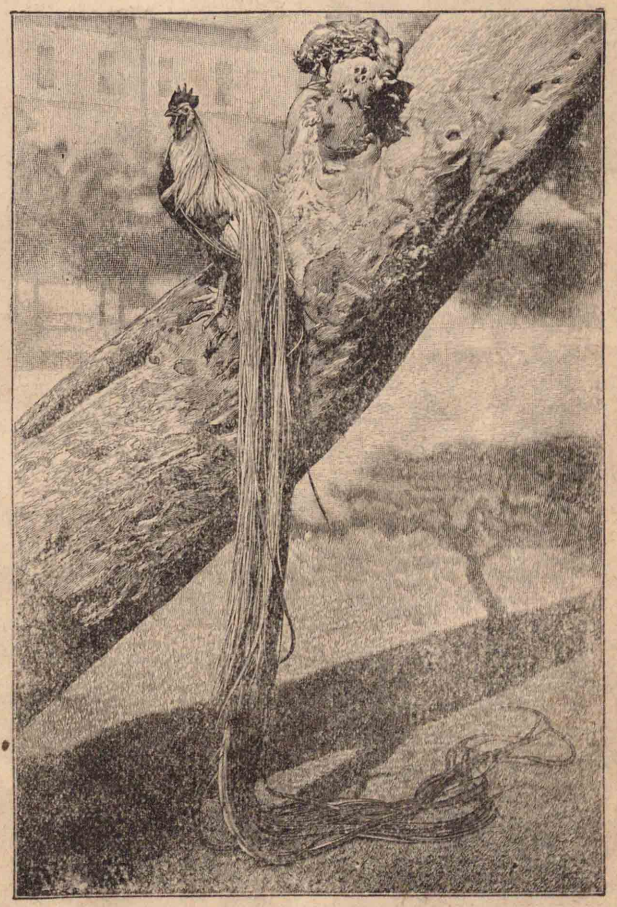
はれることもあるが、多くは文明の進歩と共に、天然物其のもの、又はそれの存在してゐる土地を利用することが益〻多くなるため、又工業の進歩發達につれて、煤煙や有毒ガス等の發生が多くなるためである。そこで世界各國では、それ等動物・植物・地質・鑛物等の中で、絶滅に瀕したもの、又は其の代表的標本ともなるべきもの、即ち自然界を記念すべきものを總べて天然記念物と稱して、其の保存に大いに力を注いでゐる。

我が日本は、氣候が比較的溫和で、雨量が多く、國土が寒帶から熱帶に及んでゐる等の關係上、動物・植物の種類が非常に多く、隨つて天然記念物に富んでゐる。これは

我が國の誇とするところであるが、今にして保存に力めなければ、終には此の誇を失つてしまふおそれがある。政府もこゝに着目して、大正八年これが保存法令を發布し、其の指定により、着々と保存の方法を講じてゐる。しかしかやうな事は、單に法令の力によつてのみ成し遂げられるものではなく、國民各自がよく其の尊ぶべき所以を解して、共に力を盡くさなければならぬ。

今我が國に於ける天然記念物の例として二三のものを擧げてみると、動物に關するものでは、日本固有の動物たる鹿兒島縣奄美大島のるりかけす・黑兎、或は岐阜縣・岡山縣等に產し、東部アジヤの珍奇な動物として知

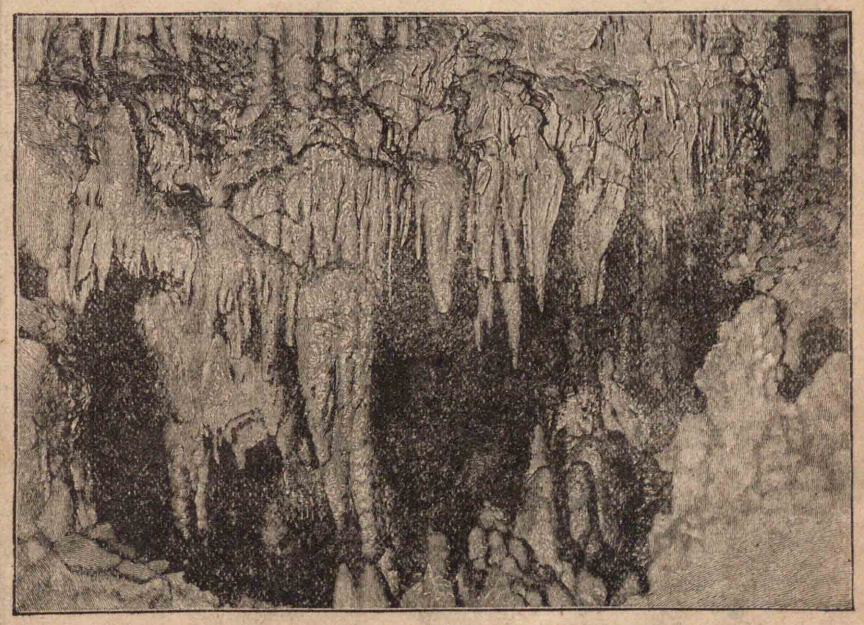
られてゐる大山椒魚の類がある。又飼育によつて著しい變化を生じた高知縣の長尾鶏などもそれである。其の他特殊な動物の繁殖地又は渡來地としては、青森縣に於けるうみねこ繁殖地、鹿兒島縣・山口縣に於ける鶴の渡來地なども保存の指定を受けてゐる。



植物に關するものでは、社叢（神社の森）・名木・巨樹・原始林・珍奇植物・高山植物帶等がある。奈良春日神社のなぎの純林は社叢の代表的のもの、奈良八重櫻・高砂の松・尾上の松・曾根の松は、或は珍種として、或は樹形のりつぱな點から、名木として保存されてゐる。又鹿兒島縣蒲生の樟は、目通りの周圍七丈五尺に及ぶ日本第一の巨樹である。珍奇植物の一例としては、岐阜・長野・愛知三縣の縣境附近に產する花の木があり、

原始林としては、北海道の野幌、奈良縣の春日山、鹿兒島縣の屋久島等が有名である。其の外、白馬連山にある高山植物帶も、一指定地としてみだりに其の中の植物を採取することを許されない。

地質・鑛物に關するものでは、山口縣・大分縣に存する鍾乳洞、滋賀縣石山寺にあ



る珪灰石の大露出等が其の例である。

由來我が國は自然の恩惠に浴することが多く、隨つて國民は昔から自然界を愛護する情に富んでゐる。德川時代に、各藩が其の領内の名勝・老樹・名木・岩窟などを保護し、或は留山と稱して名山の樹木を伐採することを禁じたことや、一種の地理書ともいふべき名所圖會等に、名木・珍獸等を紹介してゐるのでも明らかである。今や世界の國々は、それ〴〵天然記念物の保存に力を注いでゐる。早くより此の美德を有した我々日本人が、之に對する用意をゆるかせにして、天與の寶を空しく毀損してはならぬ。

第十六課　會社

現今何れの國に於ても、多人數が協力し資本を合同して、諸般の事業を經營することが盛に行はれてゐる。此の營業上の組織を會社といふ。

會社の組織には、合名會社・合資會社・株式會社及び株式合資會社の四種がある。

合名會社は、無限責任社員ばかりで組織した會社である。無限責任社員とは、會社が負債を生じた場合、之を辨濟するのに、會社の全財産を提供しても尚之を皆濟することが出來ない時には、連帶して無限に責任を負ひ、各自の財産のあらん限り其の辨濟に當るものをいふ。

合資會社は、無限責任社員と、有限責任社員即ち會社の債務辨濟に對する責任が自己の出資額だけに止る社員とを以て組織し、無限責任社員だけが業務執行の任に當り、有限責任社員は業務執行の權限のないものである。

以上二種の會社は、普通少數の人々の間にのみ成立するものであつて、親族又は知人同志ばかりで組織するものが多い。

株式會社は、其の總資本を等分して株式とし、出資者は各其の引受ける株式の數に應じて出資するものであつて、多人數の資本を合同し、大規模の事業をするのに

適してゐる。株式は略して株ともいふ。一株の金額は普通五十圓を下ることが出來ないけれども、一時に株金全額を拂ひ込むべき場合に限つて、之を二十圓まで下すことが出來る。株式を引受けて出資したものを、株主といふ。株主は、會社の債務に對して、所有株の金額以上に責任を負ふことはない。會社は株主に對して證書を交付する。其の證書は卽ち株券である。株券は他人に讓り渡すことが出來るから、株式會社の出資者卽ち株主の員數は常に一定しない。

株式會社には取締役と監査役があり、之を總稱して重役といふ。重役は株主の選擧によつて就任するものである。取締役は主として會社の業務を處理し、監査役は業務の執行に就いて取締役を監督する。株式會社の盛衰は全く其の重役の信用と手腕の如何によるのであるから、重役を選擧するには、公平無私、よく其の人物と能力を考へなければならぬ。重役たるものも亦、一意誠實を以て會社の爲に盡くす覺悟がなければならぬ。

株式合資會社は、無限責任社員と株主から成り、會社の業務は無限責任社員が擔當する。卽ち合資會社と株式會社との性質を合はせたやうなものである。

第十七課　市兵衛の話

上總國市原郡姉崎といふ處の民、總兵衛といふ者、人の

鐵砲を借持ちて鳥を打つとて、過ちて隣家の妻女を殺しつ。初よりたくみてせざりしことなればとて、死刑一等をなだめられ、伊豆の島に流されて、田宅は官に沒せられぬ。其の子萬五郎とて其の頃三歳ばかりなりしを、僕市兵衛といふ者、夫婦心を合はせ懇にいたはり養ふ。主從の禮うやうやしく、ひたすら昔ありし如くにしけり。

市兵衛家貧しければ、主の養の遂げ難からんことを憂ひて、後には一人ある娘をも江戸に伴なひ、人の許に仕へさせたり。又主人總兵衛が罪の免されんことを、流罪の年より始めて月毎に江戸に出で、府に訴へてやまず。

寶永三年ばかりにや、「子供萬五郎の慕ひ悲しみ候ふのみならず、總兵衛の父なる翁八十に及び候ふが、生涯の中唯一日見ば直ちに死すとも事足りなんと、旦夕歎き申すに忍び得ず候ふ。願はくは某を流し遣はし、總兵衛を歸し給へ。」とわりなく願ひ出でけり。

奉行荻原近江守、彼が年月たゆみなく乞ひ來るを憐み、或日問はれしは、「汝十年あまり月毎に乞へり。此の事にかゝづらひては、田作りのさはりとならんを、如何せるにや。」とありしかば、「出づる時には、甥に候ふ作十郎と申す者に、後の事あづけ置きて江戸に出で、四日が程に歸り候ふ。」と申す。「さあらば旅宿の費もそこばくならんは

如何。」とありしに、「某、淺草なる旅籠屋に宿り候ふ。初め打續きて宿り候ふに、何事ぞやと問ひし故、事の由を語り候へば、憐がりて其の費を取らず。且いとも眞實にもてあつかひくれ候ふ。」と申しけり。

近江守を始め諸司大いに感じ、市兵衛の如き者を褒美あらば自ら德化の一とならんと、其の由を上達す。かくて總兵衛が事は免すべきにあらねば是非もなしとて、姉崎に折からあるじなき田一町あまりありしに、家一つを添へて市兵衛に賜ひぬ。市兵衛重ねて申しけるは、「淺からぬ御惠にて候へども、主の罪の免されんことをこそ年月願ひ候ふに、其の沙汰はなくて、某かゝる御惠にうるほひ候ふこと、本意の外に候ふ。同じくは此の田宅を萬五郎に下し賜はり候はばや。」とひたすらに願ひければ、いよ〳〵其の志をめでて再び上達あり。萬五郎には外の田宅を下し賜ひにけり。（松崎堯臣「窓のすさみ」ニ據ル）

第十八課　夏の曉

一

殘れる月の影踏みて、
歌ふ唱歌もさわやかに、
小川のほとり牛飼へる
村の男の子が胸の邊を、
吹くや朝風そよ〳〵と。

働く身には憂なし。

二

またゝく星を戴きて、
露の白玉踏みしだき、
向ひの岡にまぐさ刈る
里の少女が前髪を、
吹くや朝風そよ〳〵と。
働く身には憂なし。

三

朝食の煙うちなびき、
仰ぐ日の出の麗かに、

小牛追ひつゝ歸る子が、
吹くや口笛勇ましく、
生氣溢るゝ朝ぼらけ、
働く身には望あり。

四

家路を急ぐ少女子が、
籠に添へたる白百合の、
にほへるまみのにこやかに、
足の運もいそ〳〵と、
生氣溢るゝ朝ぼらけ、
働く身には望あり。

第十九課　土に立脚せよ

先般は御病氣の趣御案じ申上げ居候處、御全快の御報に接し、喜悅に堪へず候。

過日御案内申上候通り、去る七月一日午後四時より、本村出身の農學博士横山道雄氏の御講演これあり候。時恰も農繁期に際し、人集りも如何かと懸念致候處、幸に植附も終り少閑を得候ため、村内はもとより他村よりも續々來集致し、聽衆三百に餘り、近頃になき盛會にて候ひき。

講演は約二時間半に及び、内容も多岐にわたり候が、小生の最も感動致候は、最後に農村民の覺悟に就いて述べられたる條に候。博士は此の邊頗る熱誠をこめられ、殆ど聲涙共に下る有様にて、會衆皆傾聽感激致したるやうに見受け候。

博士によれば、農村の振興といひ、農事の改良といひ、農村に關する問題は種々なれども、要するに最も大切なるは、農村民の確乎たる自覺と不拔の決心とに存すとて、大要次の如く述べられ候。

現時に於ける都市の異常なる發達膨脹は、

果して慶すべきか、はた弔すべきか。今や都會の風潮は全國に波及し、其の餘弊として、人心やゝもすれば奢侈を追ひ、浮華を喜び、甚だしきは都會にあこがるゝの極、農村の存在を忘れんとする者あるに至れり。されど試みに思へ、都會は其の基礎を農村に有せざるべからざるを。若し農村徒に疲弊して都會のみ異常の發達膨脹をなさば、そは一種の病的現象にして、寧ろ甚だ危險なりといはざるべからず。

此の時に當りて、農村の人は非常なる自覚と決心とをなかるべからず。自覚とは何ぞ、卽ち農業の尊き使命を知り、之に從事するを以て誇とすること是なり。決心とは何ぞ、卽ち浮華輕薄の惡風を顧みず、堅く土に立脚することと是なり。土こそは萬物の母。あらゆる生命と生産とは、其の根元を土に有す。土を離れて人生あるなし。土にこそ絶對無限の價値は存すれ。

土はあらゆる物を淨化す。まことに農民は土の上に精神的殿堂を築け。熱誠と勤勉と、忍苦と努力と、質實と剛健と、卒直と正義と、

同情と親切と、自尊と謙遜と、獨立と協同と、あらゆる男性的道義を樹立して、之を都會に送れ。都會が知識を以て農村に教ふるに對し、農村は道義を以て都會の範たるを期せよ。農村はたとふれば河の上流にして、都會は其の下流なり。上流の水澄みに澄まば、下流自ら清からざらんや。

談終ると共に拍手は會堂をゆるがし申候。平素かゝる催に最も御熱心なる貴兄が、御病氣のため御臨席なかりしは甚だ遺憾と存じ、右概略御報申上候。尚暫くは御加養專一に願上候。

第二十課　夕立雲

畠のものも、田のものも、林のものも、庭のものも、蟲も、牛馬も、犬猫も、人も、あらゆる生きものは皆雨を待ちこがれた。

「おしめりがなければ、街道はほこりで歩けないやうでございます。」

と、甲州街道から毎日仕事に來るおかみさんが言つた。

「これでおしめりさへあれば、ほんたうに好いお盆ですがね。」

と、うちの女中もこぼしてゐた。

此の二三日非常に蒸す。東の方に雲が立つた日もある。二三度雷鳴を聞いたこともある。

「今に夕立が來る。」

かう言つて幾日か過ぎた。

夕飯を早く濟まして庭に出ると、北からひやりと風が來た。目を上げると、果して北に一團の青黑い雲が立つてゐる。其の雲を背にして、こんもりした隣家の杉や樫の木立、孟宗竹の藪などが、濃い綠を浮かしてゐる。

「夕立が來るぞ。」

自分は大聲に呼んで、手早く庭の乾し物・履物などを片付ける。裏庭では、女中が驅けて來て、洗濯物を取入れる。

やがて妻や子が庭に下りて來た頃は、北の一隅に見えてゐた青黑い雲が、忽ちの中にむら〳〵と湧起つて、濁つた煙色になり、見る〳〵大空をはひ上り、大軍の散開するやうに、東に、西に、天心に、ずうつと廣がつて來た。

三人は芝生に立つて驚歎の目を見はつて、此のすさまじい雨雲の活動を見た。

青空は今南の一方に押縮められ、煤煙の色をした雲の大軍は、其の青空をすら餘さじものをと、南を指してひた押しに押寄せてゐる。つい今しがたまで雨を戀しがつてゐた大地のあへぎは何處へ行つたか、唯十分か十五分の中に世界は恐しい雨雲の下に閉込められて、冷

たい暗いものとなつた。

雲の運動は秒一秒劇しくなつた。南を指して流れる雲、渦巻く雲、じつと止つて動かぬ雲、雲の中から生まれる雲、雲をかすめて移り行く雲、濃くなり、淡くなり、濃くなり、北から東へ、東から西へ、西から南へ、逆流して南から東へ、世界中の煙突といふ煙突から限なく湧く煤煙を此處に集めたやうに、目を驚かす雲の大行軍、音を聞かぬが不思議である。

我等は驚異の目を見はつて、此の活動する雲の下に、魅せられたやうにたゝずんだ。冷たい風がすうつ〳〵と顔に當る。後れ馳せに雷がそろ〳〵鳴り出した。北の方

で、赤や紫の電光が時々ぱつ〳〵と半天を照らしてひらめく。近づく雷雨を感じつゝ、我等は猶頭上の雲から目を離し得なかつた。うすぎたない煤煙色をした滿天の雲は、益〻南へ流れる、水のやうに、霧のやうに、煙のやうに。空は皆動いてゐる。廣い空のどの一寸四方でも、動いてゐないところはない。皆恐しい勢を以て動いてゐる。仰ぎ見る我等は、流れる雲に引きずられて、やゝもすれば驅出しさうになる足を、踏みしめ〳〵立つてゐなければならなかつた。

時々西の方で、或一箇所雲が薄れて、探照燈の光めいた生白い一道の明りが斜に落ちて來て、深い〳〵井戸の

底でも照らすやうに、我等と足許の芝生だけを明るくする。我等ははつと驚の目を見合はす。と思ふと、もう眞暗になつてゐる。妻や子の顔は土色になつた。草木も人も息を潜めたかのやうに、一切の物音は絶えた。何處から來たか、犬のデカが不安な目つきをして見上げつゝ、大きな體を主人の脚にすりつける。

空はとう〳〵雲に包まれてしまつた。著しく水氣を含んだ北風が、ぱつ〳〵と顔を打つて來た。やがて大粒の雨が來た。雷も頭上近くなつた。雲見の一群は急いで家にはいつた。おも屋の南側の雨戸だけ殘して、悉く戸をしめた。暗いのでランプをつけた。

ざあつと降出した。雷が鳴る。庭中の雨脚をすさまじく見せて、ぴかりと電が光る。

見る〳〵庭は川になる。雨が飛石を打つてはねかへる。目に入る限の青葉が一葉々々に雨を浴びて、嬉しさうにぞく〳〵身を震はしてゐる。

「あゝ、好いおしめりだ。」

かう言つた我等は、更に

「まだ七時前だよ。まあ。」

といふ女中の聲に驚かされた。

夕立から本降になつて、雨は夜すがら降つた。（徳富健次郎「みゝずのたはこと」ニ據ル）

第二十一課　地震

地震の起るのは種々の原因によるが、一口にいへば、地殼を構成する物質が、久しい間蓄積せられた壓力に堪へきれなくなつて、急激な變動を起すに基づく。此の變動が波動となつて四方に廣がる現象を、地震といふ。地震中大規模のものには、いはゆる斷層地震が多い。これは變動と共に、新に斷層を伴なひ、或は既成の斷層に移動を起すものである。さうして是等の變化は、實際に地表面にまで及ぶことも少くない。明治二十四年の濃尾地震、同三十九年のアメリカ合衆國サンフランシスコ地震等は此の種の適例である。

火山が爆發する時も、其の勢力の一部分を以て四圍の地に激動を與へ、地震を起すが、其の震動は極めて小さい。之に反して、爆發に伴なふ空氣の波動は、四百キロメートル餘の遠距離までも達して、家屋を振動せしめることがある。明治四十二年に於ける淺間山の爆發などはこれである。又火山の破裂に前後して、多くの地震を起すことがある。これは大地震ではないが、それでも粗造の構造物は、時として多少の損害を被ることがないではない。明治四十三年の有珠山噴火に先だつて起つた地震や、大正三年の櫻島噴火後の地震などはこれである。

高讀農三

或地方で地震が起らうとする前には、其の附近の地殼は既に極めて不安定の狀態にあるのであるから、地表面上に影響する外力の變化に伴なつて、活動を始めることが往々ある。外力とは、大氣の壓力、雨雪、潮汐等のことであつて、是等の變化は、地震の誘因ともいふべきものである。

地震は地下に存する弱點を除去するものであるから、一度大地震の起つた後には、引續いて同一中心地から、更に大破壞的地震の起ることはないわけである。又餘震は時としておびたゞしい數に達することがあるけれども、其の破壞力は、普通最初の地震の十分の一以下のものである。且此の餘震があるために、地殼は再びもとの安定の情況に復することが出來るのであるから、却つて喜ぶべき現象といはねばならぬ。

地震動の强弱は、地震の大小と震原の遠近によつて違ふけれども、其の土地の地質狀態及び地形に關することも少くない。例へば斷崖・河岸等では、常に其の震動が他よりも大きい。又岩石や赤土の固い地盤では震動は弱いが、泥又は砂地であつたり、埋立地のやうに土質の柔い場所であると、震動が非常に强く、時によると、水や泥砂を噴出したり、地割れを生じたりすることがある。地震の震動は、普通斜に往復運動をするものである。故

に地上の物體は、上下にも水平にも動くことになる。但し震原に近い處では上下動が著しく、震原から遠ざかるに隨つて水平動が主となり、上下動は減じて行く。被害の程度は勿論震原に近い程甚だしい。

我が國には古來地震が極めて多く、大地震も少くないが、家屋は大抵輕い木造であるから、死傷者は割合に少い。去る大正十二年の關東大地震は、東京市内の死亡者だけでも約六萬、實に空前の大慘事といはれてゐるが、それでも直接地震のために壓死したのは、僅かに其の百分の一强で、大部分は地震によつて起つた火災のために死んだのである。

かういふ風に、我が國の家屋は地震に對して比較的危險が少いから、地震の際にも決して狼狽してはならぬ。勿論容易に屋外の安全地に逃げることの出來る場合には、早く戸外に出る方がよいが、若し途中危險な處を通らねばならぬとか、逃出しても避難すべき場所の無い場合には、寧ろ屋内に止つて、丈夫な机や寢臺の下などに身をよせてゐる方がよい。殊に木造の二階建では、たとひ階下がつぶれても二階はつぶれない場合が多いから、二階に居て地震に會つても、あわてて飛下りるやうなことをしてはならぬ。又一旦屋外に出たならば、屋根から落ちる瓦や、石垣・煉瓦塀などの崩れるために

負傷しないやうに注意し、避難地が海岸や谷間であつたら、津浪や崖崩等についても用心しなければならぬ。」

以上は火災の恐のない場合であるが、若し火を使用してゐた際ならば、何よりも先づ火の元に注意して、火事の起らぬ用心をすることが肝要である。木造家屋の多い我が國では、此の注意を怠ると、思ひがけない大慘害を招いて、經濟的にも精神的にも償ひ難い損害を被ることになる。

第二十二課　日本の風土

試みに大日本全圖に向つて、帝國領土の廣がりを見よ。樺太・千島・北海道・本州・四國・九州・琉球・臺灣の島々は、東北より斜に長く西南に連なり、最南の臺灣の一部は既に熱帶の内にはいつてゐる。又朝鮮は滿洲及びシベリヤに接して、アジヤ大陸の一部分である。されば地方によつて氣候に甚だしい差異があり、生物の種類も頗る多い。

寒地から熱地へ、熱地から寒地へ渡る禽鳥で、我が帝國の領土を過ぎて翼を休めるものは少くない。鶴の群はシベリヤ方面から飛んで來て、ほがらかな聲を朝鮮の空に響かし、鷺は熱帶地方から飛んで來て、一望十里の青田に下立つ。獸には象や犀・獅子などこそ居ないが、野獸に家畜に其の種類はかなり多い。植物も亦豐富で、春

は櫻、秋は花よりも美しい紅葉が、松・杉・檜などの常磐木の間を點綴してゐる景色は、獨り我が國に於てのみ見られるのである。

本州全體は溫帶の中部にあり、氣候は概ね溫和で、土地も豐饒で、水蒸氣も多量であるから、到る處植物がよく繁茂する。冬季には北西の風が多く、夏季には南東の風が多い。春季から夏季に移り變りの際には、氣壓配置の變化に伴なつて、陰雨連日にわたり、いはゆる梅雨をなす。我が國の米產國であるのは、實に此の梅雨に負ふ所が多い。又冬季には、アジヤ大陸から吹いて來る北西風が、日本海上の水蒸氣を運び來つて、本州の中央に連なる山脈に吹着ける。それがため凍雲日光をさへぎり、降積る雪は北陸・山陰の地を銀世界にする。由來太平洋岸と日本海岸は種々の點に於て相反するが如く、晴曇に於ても全く趣を異にする。冬季、上・信・越の境にそびえる三國峠に立つて北方を望めば、密雲層々空を覆ふに、南方を顧みれば、一天片雲なく、まばゆき日の光が山岳・原野を照らして、數十里の風光が一望に入るのに驚くのである。

火山脈は本州を縱斷橫斷してをつて、昔から三國一の名山と稱へた富士山を始め、磐梯山・赤城山・榛名山・淺間山・立山・白山等の山々、現に噴火してゐるものもあり、今

は噴火してゐないものもあるが、其の變化に富んだ山容は、風景の美を添へることが多い。しかも外國の火山の如きはげ山は少く、何れも綠樹鬱蒼として、其の中腹又は麓には火山湖や溫泉が多い。斯くの如き山脈によつて分たれた地勢は、もとより茫々たる大平野をなす餘裕が無い。隨つて川には長流が少く、急流奔馬の如く、直ちに走つて海に入るものが多い。

第二十三課　十和田湖の養魚(一)

何時の時代か、南祖坊といふ行者が十和田湖に來た。彼は、湖の主として棲む神通自在の大蛇を、あらたかなる法力によつて退散させ、湖畔に青龍權現といふ祠堂を

建立して、自ら其の別當となつた。

此の傳說は十和田湖を極端に神祕化してしまつた。每年八十八夜から二百十日までの間に、近國の善男善女は白衣の行者を先導とし、法螺の音に山谷の木靈を呼びさましつゝ、岩角を攀ぢ、荊棘をひらき、溪流を涉つて此の靈場に參籠し、一七日間祈願を籠めるのを常とした。滿願の日は更に社殿の背後の峻坂を攀ぢ、奧の院に至つて、中湖の底知れぬ深潭に米錢を投じ、其の沈み行くさまによつて、願望の成否、作物の豐凶等を占なふのであつた。

清冽な十和田湖の水には魚一匹棲んでゐなかつた。此

の事實はかの青龍權現の神威とからんで、拔くべからざる迷信を生んだ。神靈は魚族を忌み給ふものとして、參詣者は一七日以前から嚴に魚食を斷ち、精進潔齋を念とした。湖畔に來ては、魚といふ一語を發するのさへ、神罰を受けるものと堅く信じて疑はなかつた。

明治十四年、十和田鑛山に勤務を命ぜられた和井内貞行は、日夕此の湖を眺めながら深く考へた。「水清ければ魚棲まず。」との諺はあるが、此の湖の岸には水草が繁茂し、小蟲が浮游してゐる。魚を放流したら必ず繁殖するに相違ないと。そこで彼は略養魚經營の案を立てて之を知人や同僚に謀つたが、何人も一笑に附して顧みな

高讀農三

い。殊にいけないのはかの傳統的迷信であつた。無智の人は專ら神威をけがし、神怒を買ふものとして、極力之に反對した。

しかし貞行は決して之にひるまなかつた。一度決心したことは貫徹せねば止まぬ強い意志を有する彼である。事こゝに至つては獨力で當る外はないと、深く心に期した。そこで彼は俸給の幾分を割いて、先づ鯉六百尾を購ひ、茫々たる湖水に放流した。實に明治十七年の秋で、これこそ貞行が養魚經營の端緒であると共に、十和田

高讀農三

湖始つて以來空前の出來事でもあつた。

彼は其の後年々鯉・鮒の稚魚を放流して專ら其の繁殖を望んだが、「三里四方の湖に僅かばかりの魚の子を放したとてそれが何にならう。」「いや今に神罰が下るに違ひない。」と、世人は唯彼をあざ笑ふのみであつた。

數年は過ぎた。或年の秋、一人の炭燒が湖畔の山路をたどりながら、ふと波間に躍る鯉を見た。翌年の春は尺餘の鯉が湖岸の處々に現れ、鮒も盛に游泳してゐた。湖畔の住民は殆ど南祖坊の法力以上に驚いた。さうして我も我もと捕つては、舌鼓を打つた。これでは折角の魚も忽ちに盡きてしまふであらうが、如何せん、貞行はまだ

湖水の使用權を得てゐなかつたので、空しく之を傍觀する外はなかつた。

其の後彼は其の筋に請願して、始めて十和田湖の使用權を得、いよ〳〵事業を擴張したので、明治三十年頃には、二尺にも及ぶ鯉が湖面に姿を現すやうになつた。事業は今や殆ど成功の域に達したのであるが、しかし實際に漁獲するに及んで、意外に彼は養鯉の失敗であることを覺らねばならなかつた。元來鯉は敏捷な魚である上に、湖が深いから、網を投じても容易に捕らへられぬ。隨つて其の漁期は、五六月頃湖岸近く現れる產卵の時期に限られてしまふ。漁獲の困難と漁期の短いこと

が、漁獲高を少からしめた。のみならず、鯉は生きてゐないと需要がなく、死魚は殆ど捨賣にしても顧みられぬ。交通の不便な山道を生魚のまゝで運ぶには、費用がかさむ上に、いくら綿密な注意をしても途中で死ぬのが多かつた。かういふ風で、鯉はよく湖中に繁殖しながら、事業は全く收支償はず、彼は多大の損失を蒙つた。世人はそれ見よとばかり、今更青龍權現の神罰を引合に出して彼を嘲笑した。

第二十四課　十和田湖の養魚(三)

十餘年の苦心になる養鯉經營が全く失敗であると知つて、さすがに貞行も心はさびしかつた。しかし彼の意

志は決してこれがために碎けたのではない。彼は養鯉から養鱒に轉じた。鱒は鯉よりも漁期が長く、又鯉の如く生魚として市場に出す必要がない。殊に十和田湖の水溫・水質は、鱒の生育に最も適當であるといふのが、水産專門家の一致した意見であつた。

そこで明治三十三年始めて琵琶湖の養魚場から、次いで日光養魚場から鱒の卵を求めて孵化し、數萬の稚魚を次々に放流した。ところがこれも亦失敗に終つた。鱒はよく成育したにかゝはらず、多くは奥入瀨川の瀧を下つて逃亡した。殘つたものも、とも食のために減少し、又は散在的習性を有するために、意の如く漁獲するこ

とが出來なかつた。

二回の失敗に負債は山と積つた。世人は全く彼を相手にしなくなつた。しかも彼の心はまだ何物をか求めて止まない。たま〳〵北海道の支笏湖に養殖してゐる姫鱒のことを聞くを得たのは、彼の爲に實に百萬の味方であつた。姫鱒は普通の鱒より小さいが、繁殖が容易であり、とも食することも殆どなく、殊に三年目か四年目には必ず放流地點に回歸して產卵する特性があるといふのであつた。

彼は時代おくれの、しかも唯一の寶であつた懷中時計を賣り、衣類も殆ど裸にならんばかりに入質して、やつ

と二十圓を調達した。かくて明治三十五年十二月支笏湖から姫鱒の卵を求めて孵化育成に着手し、翌年四月五萬の稚魚を放流した。

しかし成績の良否は三年乃至四年目でないと知ることが出來ぬ。此の間に於て極度の貧窮が一家を襲つた。殆ど食ふ物にさへ事を缺いて、三度の食を二度に減ずることがしば〳〵であつた。世人の嘲罵は以前にも增して一層甚だしかつた。

元來彼の養魚經營に對しては、朋友親戚はもとより、父母も亦反對者であつたが、唯一人の、しかも熱心な賛成者として妻のかつ子があつた。多年失敗に續く失敗に

苦心慘澹たる夫を、終始よく激勵したのは此の妻であつた。さうして赤貧洗ふが如き中に、かつ子は陰に陽に、力を盡くして夫を慰藉することを忘れなかつた。

時は來た。明治三十八年の初秋、貞行が或日孵化場の物見梯子に上つて湖を見渡すと、銀鱗をひらめかし、水面を色どつて游ぎ來る無數の魚群があつた。鱒は正に錦を着て故郷に歸つたのである。彼は狂喜して家に走り、半生の苦を分つた妻を誘つた。さうして二人は此のおびたゞしき魚群を見つめながら、暫し感激の涙に咽んだ。

魚の大群は日に〳〵押寄せる。網を下せば數十尾數百

尾が立所に漁獲された。彼は忽ち郷里鹿角郡毛馬内の兩親の許に馳せつけた。思へば幼時から父と爭つたこともなかつたのに、唯此の養魚のことでは意見を異にし、あまつさへ兩親に少からぬ迷惑をかけ、心配をかけたことが、貞行には遺憾の極みであつた。彼は兩親を馬背に乘せて湖畔に伴なひ、此の魚の大群を見せ、始めて父母を安心させることが出來た。

二十二年にして養魚經營の曙光が見えた。始めて十和田湖に鯉を放流した時、二十七歳の壯者であつた彼は、今や鬢髪に白く霜が置いてゐた。

明治三十八年は東北地方の凶作で、殊に山間僻地の十

和田湖畔には、米穀はおろか雑穀さへ缺乏し、住民は木の實草の根をあさるやうな狀態であつた。貞行は彼等に漁具を貸與して鱒を捕獲せしめ、其の賣上代金千三百圓を悉く彼等に施した。さうして此の時の救恤に最も力を盡くしたのは、妻のかつ子であつた。それも多年の失敗に一家が負債に苦しみ、生活に苦しんでゐる半ばであつた。

十和田湖の養魚經營は、其の後着々として歩を進めた。明治四十一年東宮殿下東北地方御巡啓の際、貞行は特に拜謁を仰せ付けられ、畏くも次の令旨を賜はつた。

益々事業ニ精勵シ、國益ヲ計ルベシ。

彼は感奮していよ〳〵事業の擴張を圖つた。大正六年湖畔生出の地に築造した孵化場は、實に日本でも有數のものである。一年の漁獲高約百萬尾、採卵約二三百萬粒で、卵の半數は此處で孵化し、他は之を各府縣の湖沼に分配してゐる。

大正十一年五月十六日、貞行は病を以て六十五歳の生を終へた。危篤の趣天聽に達し、特旨を以て正七位に叙せられた。

第二十五課　罐詰

食物の腐敗を防いで長く貯へておくにはいろ〳〵の方法があるが、最も完全なのは罐詰にすることである。

物の腐敗するのは細菌の作用によるのであるから、細菌が附着しないやうにすれば、腐敗は防げるわけである。罐詰は實に此の理によつて作つたもので、罐の密閉によつて外界との接觸を斷ち、熱を加へて罐内の細菌を死滅せしめるのである。かうすれば、「蒔かぬ種は生えぬ」理によつて、罐内に細菌が發生することはないから、内容物は腐敗する憂がない。

罐詰には、魚肉や獸肉のもあれば、野菜や果物のもある。其のまゝ食用になるやうに調味したものもあれば、調理の原料とするために水煮にしたものもある。罐詰の種類によりそれ〴〵其の製造法に多少の差異はあるが、大體の工程は皆同樣である。中でも鮭や蟹は、一時に多量の漁獲があり、又之を手早く處理しなければならぬ必要があるので、是等の罐詰工場は、規模が頗る大きく、又設備もよく整つてゐる。今鮭の罐詰製造の有樣を述べてみよう。

陸揚された無數の鮭は、自動運搬機でどし〳〵と工場に運ばれ、先づ第一に調理機にかゝる。此處で頭・尾・鰭は切取られ、内臓は取除かれ、更に冷水できれいに洗はれる。これだけの作業は一臺の機械で行はれ、しかも一分間に優に六十尾の鮭を處理する。第二の機械は魚肉切斷機である。此處で罐の大きさに切斷された鮭の肉は、

次の肉詰機に移され、少量の塩を加へて罐に詰められる。次は此の罐に蓋をするのであるが、最初から蓋を固く締めてしまふと、後に蒸釜に入れて加熱殺菌する際に、罐内の空氣が膨脹して罐をいためる恐があるから、先づ假締機にかけ、蓋を緩く締めて、次の脱氣函に送る。脱氣函の内部は常に百度ぐらゐの温度が保たれてをるから、假締のまゝ此の中に十五六分も入れておくと、罐内の空氣は膨脹して、大部分蓋の隙間から脱出する。そこで之を本締機にかけ、蓋を締めつけ、密閉してしまふ。密閉した罐詰は、次の蒸釜に入れ、熱を十分に加へて殺菌する。こゝで肉も完全に煮沸されるのである。

此の外に、物によつては、初から本締にして蒸釜に入れ、罐に穴をあけて空氣を抜き、後から其の穴をふさぐ方法もあるが、それは空氣と共に肉汁等が流出することなどもあつて、完全な方法とはいへない。

完全に製造された罐詰は、かなり長い貯藏に堪へるものである。かつてイギリスの北極探檢隊が極地に於て拾ひ取つて來た罐詰を、博物館に陳列しておいたが、七八十年たつて、試みに蓋を開いてみたら、少しも腐敗してゐなかつた、又難破船から漂着した罐詰を、其の後五十年もたつて明けてみたら、なほ十分食用に堪へたなど、いろ〳〵のおもしろい話が傳へられてゐる。しかし

罐詰にも時々不良の品があるから、よく注意しなければならぬ。罐をたゝくとかちく〳〵と固い音を發するのは良い罐詰であるが、之に反して、ぼこく〳〵と空虛な音を發するものや、蓋や底がふくれ上つてゐるのは、不良な品である。これは殺菌が不十分であつたり、又は罐に疵があつて、其處から細菌が侵入したりして、中身が腐敗し、ガスを發生したものである。次に、罐詰は蓋をあけたならば、直ちに之を他の容器に移し、なるべく早く食べてしまふがよい。

第二十六課　川柳

武藏坊とかく支度に手間がとれ

義貞の勢はあさりを踏みつぶし

尊氏はとはうづもなく逃げて行き

間を見ては畠をせゝる渡守

氣のむいた所へ芽を出すつくね芋

道問へば一度に動く田植笠

寢てゐても團扇の動く親心

菜畠のなほ〳〵書に蕎麥の花

よつぴいてひやうと放たぬ案山子かな

黑犬をちやうちんにする雪の道

犬を見て猫は背中へ腹を立て

いゝ着物着ると内でもかしこまり

知つた人ばかりへ強ひる子の給仕
いゝ所へ來たと背高使はれる
人を汲出して井戸がへしまひなり

第二十七課　待賢門の戰

左衞門佐重盛、討手の大將を承つて言ふやう、「年號は平治なり。都は平安なり。我等は平氏なり。三事相應ぜり。敵を平げんこと何の疑かあるべき。」と、三千餘騎を三手に分け、陽明・待賢・郁芳の三門に押寄せたり。源氏方には、三門をさし堅めて、大庭に馬ども多く引立て、用意をさをさ怠なし。

重盛は、手兵五百餘騎を率ゐて、信賴が守れる待賢門に

向ひ、大音聲に呼ばはりけるは、「此の門の大將軍を、信賴卿と見るはひが目か。斯く申すは、桓武天皇の後裔、太宰大貳清盛が嫡子、左衞門佐重盛。生年二十三。」と名乘りかくるに、臆病なる信賴、返事にも及ばず、「それ防げ、侍ども。」とて引退く。大將退却すれば、防ぐ侍一人もなし。我先にと逃げければ、重盛愈勇みて、大庭のむくの木の下まで攻めつけたり。義朝之を見て、「惡源太は無きか。信賴といふ大臆病人が、待賢門を打破られつるぞや。あれ追出せ。」と呼ばはりければ、惡源太義平、「承り候ふ。」とて驅出でたり。續く兵には、鎌田兵衞・後藤兵衞・佐佐木源三・波多野次郎・三浦荒次郎・須藤刑部・齋藤別當・岡部六彌太・猪俣小平

六、熊谷次郎・平山武者所・金子十郎・足立右馬允・上總介八郎・關次郎・片桐小八郎大夫、以上十七騎、くつばみを並べて馳向ふ。

惡源太義平、大音聲を上げて、「此の手の大將は誰人ぞ。名乘れ、聞かん。斯く申すは、清和天皇九代の後裔、左馬頭義朝の嫡子、鎌倉の惡源太義平。生年十五歲の初陣より、度度の合戰に一度も不覺の名を取らず、年積りて十九歲。見參せん。」とて、五百騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、縱樣橫樣十文字に敵をさつとけちらして、「端武者どもには目なかけそ。大將軍を組んで討て。」といふ〳〵、大庭のむくの木を中に立て、

左近の櫻、右近の橘のあたりを七八度追廻して、組まん組まんとぞもみたりける。十七騎に驅立てられて、平家の五百騎、かなはじと引退く。

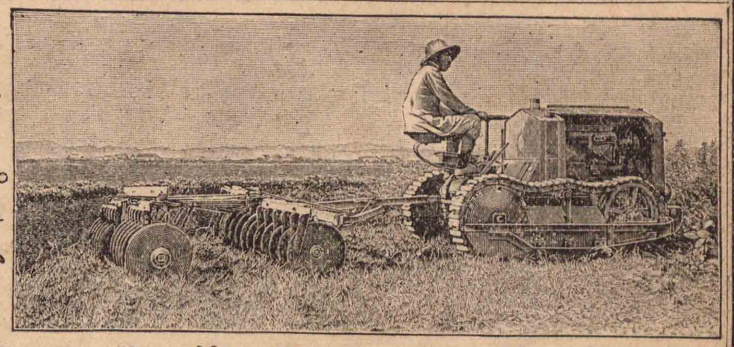
重盛弓杖ついて馬の息をつがする所に、筑後守家貞つと

參りて、「あつぱれ、平將軍の再來かな。」といふを聞きて、今一度驅けて家貞に見せんとや思ひけん、更に新手の五百騎を引具して、またむくの木の下まで攻寄せたり。惡源太驅向ひ、「兵は皆新手なれども、大將は元の重盛なり。此の度こそは討ちもらすな。」と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、我先にと進み出づ。惡源太弓をば小脇にかいはさみ、鐙踏張り突立上り、「我も源氏の嫡男なり。御邊も平氏の嫡男なり。よき敵ぞ。寄れや、組まん。」といふまゝに、さきの如くむくの木の下を追廻して、五六度までもみたりけり。重盛またもかなはじと、門を出でて引退く。惡源太二度までも敵を追ひまくり、暫し馬に息つが

するを、義朝遙かに見て、「汝が不覺に防げばこそ、敵度々馳入るなれ。あれ追出せ。」と言ひやれば、義平聞きもあへず、「承り候ふ。進めや、者ども。」と、十七騎共に討つて出で、敵五百騎が中へ面もふらず割つて入る。浮足立つたる平家勢、馬の足を立てかねて、逃行く樣ぞ見苦しき。義朝之を見て、「我が子ながらも、義平はよく驅けたるものかな。あ、驅けたり。」とぞほめたりける。（「平治物語」ニ據ル）

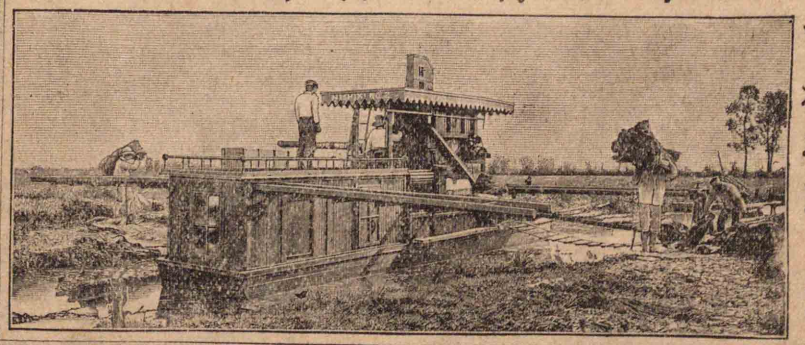
第二十八課　兒島農場

藤田村（岡山縣兒島郡）に入れば、一望十里、萬頃の稻田漸く黃ばまんとす。此の村の耕作、トラクターを用ふと聞けど、秋なれば今は見るに由なし。道の邊の溝渠には、脫穀船の、よ



しずにおほはれながらつながれたるを見る。

藤田村はもと兒島灣の干潟なりしを、近き頃拓かれて農場となりしもの、隣村興除村が藤田村と限るに築堤を以てせるは、往時海水の此のあたりまで打寄せたりし面影を今に留むるなり。しかも興除村の奥に續く妹尾町に今なほ漁民の住むは、藤田村のみにあ

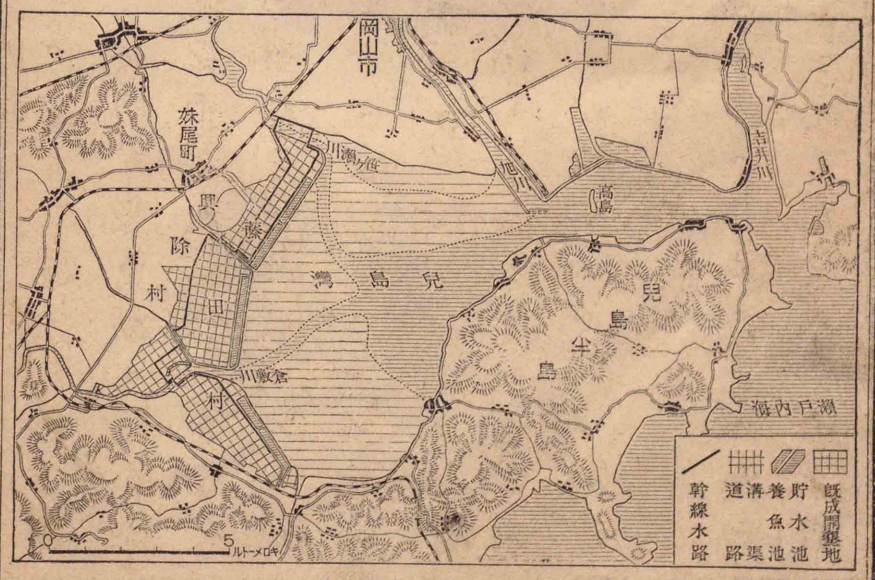


らず、興除村も亦嘗ては兒島灣の水面下にありしを物語るものなり。

藤田村が海と接する處、十數キロメートルにわたりて築堤あり。其の内側に沿うて穿てる堀江には、よし四周に叢生す。もとより築堤は石とコンクリートにて固めたれど、なほ地下より潜入する潮水の、直接に耕地をかすを防がんがために設けし堀江にして、傍、之を養魚場に當て、うなぎいなどを飼育す。秋更行けば、鳴などの渡りて、暫し此の邊に翼を休むるもの多しとなり。

築堤に立ちて沖の方を眺むれば、遙かに霞み渡れる兒島半島の山々、日を背にして藤紫の色に輝く。潮干たれ

ば海遠く、築堤の下はたゞ見る廣漠たる泥土、さながら疊を敷連ねし如く、平かに滑らかに廣がりてあり。こは倉敷・笹瀬・旭・吉井など、兒島灣に注ぐ諸川の運びし泥土が、上げ潮に押上げられて沈澱し堆積せしもの。今や之を干拓して、此處に三千ヘクタールの田圃を現出せしめんとすと聞く。



先づ灣内適宜の地に石を並べて泥土の流失を防ぎ、自然の堆積を促進せしむ。次いで堤防を築き、潮水の自由に出入するを得ざらしめ、堤防線中隨所に樋門を設けて地上の水を除き、さて地區の整理を行はば、そはやがて悉く耕地となる。しかも他よりいさゝかも土砂を運ぶ要なく、全く堆積せしもののみにて足るなり。かくの如くにして、此の廣漠たる泥土地の干拓せられたる曉には、かの藤田村と合はせて、こゝに四千ヘクタールに餘る兒島農場は完成すべしといふ。

眼を擧ぐれば、兒島灣の咽喉、高島のあるあたり、半島の山々の影淡くうつる處、白帆二三遠く浮き、右の方、宇野

港に向ふ汽車の煙白くして山際に消えゆく。脚下には、潮の滿つらし、みをの水逆しまに流れ來て、泥土は今や次第に低し。

第二十九課　晩鐘

秋の日は既にたそがれ初めぬ。落陽は遙かなる地平線の彼方に沈まんとして、金色の餘光はなやかに匂ひたれど、此方の空に立迷ふ薄黑き雲は、將に暮色の至らんとするを示すに似たり。

此方の農場に、今し祈を捧ぐる二人の男女あり。赭衣青袴の夫は、黑紫の帽を手にしつゝ、兩手を胸に持し、略正面に向ひて頭を垂れ、妻は白頭巾白前垂の姿つ

つましく、半ば夫に向ひ立ちて、手を胸に組み、これもうつむきて瞑目せり。何れも顏の細部は模糊として明らかならねど、夕の祈にはふさはしき敬虔なる表情に滿ちたるを見る。

足許に置かれたる手籠には、馬鈴薯などの入りたるべく、手押車にも亦

何物か積まれたるならん。一日の勞苦こゝに終りて、家路に急ぐべき用意は既に整ひたる折から、彼方金色に匂へる里の寺院より、高く低く、さやかに響き來る夕の鐘に、二人は暫し此の心からなる祈念を捧ぐるものなるべし。

こはフランスの畫家ジャン、フランソア、ミレーの名畫「晩鐘」に畫がかれたる情景にして、其の畫は今パリーのルーブル博物館に掲ぐ。しかも幾百萬の複製品は普く萬國に行はれて、全世界殆ど之を知らざる者なし。

北フランス、ノルマンヂー半島の一角なる僻地の農家に生まれしミレーは、少時より父母の耕作を助けて田園に勞せしが、二十歳を過ぎて後、其の非凡なる天稟たまたま一畫家を驚歎せしめ、其の慫慂によりて遂に畫學に志しぬ。しかも家貧なれば、學資は多く自ら得ざるべからず。一世の畫家となりし後も、其の畫趣は當時の世俗に解せられずして、幾多の名作却つて多くは誹謗せらるゝのみ。彼は終生貧苦と戰はざるべからざりき。

けだしミレーの畫がく所は、都會の美にあらず、美人の粉飾にあらずして、實に額に汗して働く農夫の生活にありき。勿論從來とても農夫を寫せるものなきにあら

ねど、彼が如く、眞摯にして敬虔なる、しかも營々として刻苦するフランス農民を、如實に表現せるは絶えてなかりし所、少にして夙に農夫の生活を體驗し、殊に其の勞苦に對して溢るゝばかりの同情を持せる彼は、斯かる方面に於て全く獨自獨歩の境地を有せるものといふべし。さはあれ此の獨歩の兒は、當時フランス畫界に於ける孤兒にして、極めて少數者の外、眞に彼を解し、其の畫を喜ぶ者なかりしなり。

されば、西暦千八百五十九年、パリーのサロンに出品せる名畫「晩鐘」さへ、國人には購はれず、後日却つてベルギーの一貴族の手に入りぬ。これのみにあらず、ミレーの

畫を眞に理解し稱讃し始めたるは、其の本國に於てにあらずして、國外殊にイギリス・アメリカ合衆國に於てなりき。

然るに千八百七十五年、ミレー死するや、未だ幾何ならざるに、彼が眞價は俄に世に認められぬ。あらゆる讒誣誹謗を蒙りし彼が作品は、其の値一時に騰貴し、國人は熱狂して之を見、齊しく此の偉大なる畫家が自國人なることを誇とせり。しかも此の頃までに、大方の傑作は海を越えてアメリカ合衆國に移りたりき。かの「晩鐘」の如き、千八百八十九年の競賣に於て、端なくもフランス政府とアメリカ人との間に競爭起り、遂に後者の有と

なるや、忽ち一フランス人、更に巨額の金を投じて、其の畫をアメリカ人より回復せりといふ。

第三十課　樂地

いかなる處にも樂しき地あるべし。又いかなる處にも樂しからぬ地あるべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天のどかに霞み、水緩やかに流るゝ春の日にあたりても、快きことのみ思に滿つべくはあらず。朝の曇には雨を疑ひ、夕の風には花の散るを歎くこともある例なり。雪雲の日をさゝへて暗く、大地凍りて土に生色なく、人畜共になえかゞむ冬の時にあたりても、うら悲しきことのみの胸をふさぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に清き優しさを感じ、或は夕烏の二聲三聲にさびたる趣を覺え、木の根たく山家のゐろりのほとりに罪なき話の興を湧かし、ぬく灰はたく燒芋のあたゝかきに笑むをかしさもあるべし。金殿玉樓にも樂しき所はあるべし。居草屋にも樂しき所はあるべし。

樂しき所、樂しむべき所を見出し得れば、いかほど窮苦不快の中にありても、人は自らに勇氣を得て、苦中の苦に耐へしのび、やがて人上の人となり得ることもあらん。さなきまでも、人若し常に樂しからぬが中に樂しき地を見出さんことを心掛けて、其の習はしを我が身に附くる時は、朝夕に心もひろく、氣もゆたかになりて、自

ら人品も宜しくなり、分別も正しくなり、世をば樂しく過し得るに至らん。

樂地を見出すべし。力めて樂地を見出す習はしを身に附けんと心掛くべし。（幸田成行「洗心錄」ニ據ル）

高等小學讀本　卷三　終

昭和三年十二月十七日翻刻印刷
昭和四年一月廿一日翻刻發行

高等小學讀本卷三農村用
定價金拾貳錢は

昭和三十年三月十八日
文部省檢査濟

著作權所有

著作兼發行者　文部省

翻刻發行兼印刷者　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地　東京書籍株式會社　代表者　石川正作

印刷所　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地　東京書籍株式會社工場

發行所　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地　東京書籍株式會社